星の降りた町

狼二世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
星の降りた町

【Ｎコード】
Ｎ８３６６Ｘ

【作者名】
狼二世

【あらすじ】
夏休み。
僕、上凪悠斗は、親戚に頼まれて田舎町の夏祭りの手伝いへと向かう事になった。
電車に揺られて田舎町へ向かう最中、僕は一人の少女と出会う。
その出会いがきっかけで、僕の田舎町での日々は、ちょっと不思議で、とても面白いものに変わって行く。
これは、かつて星が降りた町の、小さな小さな物語。

第一話　田舎町と旅の道連れ

むかしむかし、この町がまだなかった頃のお話。
暗い夜の世界を、１人の女性が歩いていました。彼女はとある国のお姫様。
けれど、それは少し前までのお話です。
お姫様の国は、隣の国との戦争に敗れ、既に無くなってしまっていたから。
住み慣れた館は焼かれ、父も母も兄弟も殺され、焼け野原となった自分の国から逃げ出したお姫様。彼女は行くあてもなく彷徨い、気がつけば人が住まない、草原の真ん中に立っていました。
着ている服は破れ、履物はどこかに無くしてしまい、足は泥だけ。
もう歩く気力もなく、その場にしゃがみこんでしまいます。
人の声は聞こえないけれど、遠くからは獣の唸り声。
お姫様は考えました。私はここで死ぬのだと。このまま飢えてのたれ死ぬか、それもとも獣に食われて死んでしまうか。けれど、どちらでもいい。死ねばもう苦しい思いもしないで済むし、生きている理由もない。
けれど、お姫様は飢えて死ぬ事も、獣に食べられる事もありませんでした。
お姫様が全てを諦めた時、空から光が降りてきました。
それはまるで星が降って来たかのようでした。
降りてきた光で世界が照らされ、暗闇で覆われていた夜の世界は、太陽の下にあるように明るくなります。
気がつけば獣たちの声も聞こえなくなり、お姫様はただ、降りてきた光を見続けていました。
やがて、光が消えた時、そこにあったのは鉄の巨人と、１人の男。
男は、青い瞳でお姫様を見つめていました。
そして、お姫様に手を差し伸べます。

お姫様も、その手を握り返します。その手からは、人の温かさが伝わって来ます。
それは、お姫様にもう少しだけ生きてみよう。そう、勇気を与えるものでした。

「めでたしめでたし、かな」
読んでいた本から目を離して適当に思いついた言葉をつぶやく。
昔話の閉めだったら、これが一番だろう。
「で、これを僕に読ませて、何があるの？」
学校から帰って居間に入るやいなや、面白い読み物があるって、母さんに年季が入ったボロボロの本を渡された時は何かと思ったけれど、なんて事はない、どこにでもある童話の本だった。
「何よ、随分と淡白な反応ね。テレビで男と女がラブラブになるドラマばっかり見てるから、ラブストーリーは好きだと思ったのに」
「これがラブストーリーだったら、一寸法師も立派にラブストーリーじゃないか！」
と、言うか、男と女が出て切る日本昔話全般が。
「でも、覚えておいて損はないわよ、この話」
「は？」
「話の中で『この町』ってあったでしょ」
確かに、冒頭の方で確かにあったけど。
「今度、アンタはその町に行く事になるから」え
「え、突然何言ってんの母さん？」
突然、何を言い出すんだこの人は。僕にどこに行けと。
「えーとね、岩三郎お爺さんの事、覚えてる？」
「うん、覚えてるけど」
岩三郎おじさんは、僕の叔父だ。何度かあった事がある。
何時も日に焼けた肌をしている、筋肉隆々のたくましい男の人だ。
ホモの気がある人が見たら、思わずウホッって言いだしてしまうくらいに。たしか、年齢は五十過ぎだと言うけれど、とてもじゃない

がそうは見えない、気の良いおじさんだ。それがどうしたんだろう？
「岩三郎さん、その町に住んでるんだけどね。今年は、その伝説にまつわる夏祭りがあって、いつもより盛大にやるから人出が欲しいんだって」
「だったら、母さんは行かないの？」
「あら、こんな可愛いお嬢さんに力仕事をさせるつもり」
「お嬢さんと言い張りましたか、この二児の母が！」
まあ、確かに外見だけは見れば、高校生……いや、中学生にも通じるとは思うけれど。
「あーら、心は今でも１６歳よ。アンタより若いんだから」
「母さん、病院行こう。自分の歳も覚えてないなんて、深刻な記憶障害だ！」
「やかましい！」
そんなくだらないやり取りをしていると、不意に居間のドアが開いた。
「たっだいまー」
中に入って来たのは、僕の妹の美優だった。学校の制服を着ているところを見ると、家に帰って来たばかりのようだ。
「何してるの、お兄ちゃん」
「聞いてよ、美優。母さんが岩三郎おじさんの所に行けって――」
「え、いいなあ、お兄ちゃん。私も行きたい！」
僕が話し終わるよりも早く、妹はキラキラした目で話に食いついてきた。そういえば、美優は岩三郎さんが家に来た時は、一日中ひっついているくらい、慕っていたんだよなあ。
「そうよ、お兄ちゃんは、岩三郎お爺さんの所で、お祭りのお手伝いするの」
「ねえ、私も行って良い？」
「あらー、いいわよー」
「いいの？　行く行く！」
母さんからの了承に、無邪気に喜ぶ美優。なんか、母さんと二人で

踊り始めた。
不味いなあ、こうなったら断れない。妹はまだ小学生だ、とても一人で遠くには出せないから、誰か保護者が必要だ。あ、でもそれだったら母さんでも。
「あいた！」
「あっはは、お母さんあぶなーい」
その母は、踊っていた勢いですさまじい勢いで壁に激突していた。
……ダメだな、心配だ！　こうなったら、僕が行くしかないだろう。
「はあ……わかったよ、行ってくる」
「あら、ありがとう」
僕の了承が取れて、よっぽど嬉しかったのか、笑顔で母さんは答えた……でも、母さん、半ば強制的に行かせるのに、その満面の笑顔は何なんですか。

さて、そんなやり取りがあった日から数日。僕、上凪悠斗は電車に揺られていた。
電車と言っても只の電車じゃない。車両数2両、一日に通る本数三本と言う超ローカル線。当然と言うか、窓の外の景色は畑や山ばかりだし、僕と美優意外には、電車に乗っている人は居ない。普段は座れない座席だった占領し放題だ！　まったく嬉しくないけど。
美優は、遠出で少し疲れたのか僕の隣ですやすやと寝息をたてている。起こすのもかわいそうだし、暫くは寝かせておこう。
「これさえなければ、悪くないんだけどなあ」
言っちゃ悪いが、星空町はすさまじいまでの田舎だ。僕たちが住む東京からだと、移動するだけで普通に何時間もかかる。はっきり行って、これがすさまじく面倒だ。
「ま、たまにはこういうのも良いか」
幸い、夏休みも始まったばかりだ。ゆっくりするには良い機会なのかもしれない。

僕は再び窓の外に視線を移す。
外は相も変わらず山と畑が広がる、呆れるくらい長閑な景色。雲ひとつない快晴の空も相まって、見ごたえのある光景だった。時間さえあるのならば、自転車で走ればきっと気持ちいいだろうな。
「しつれいしまーす」
そんな事を考えていると、不意に後ろの方でドアが開く音とともに、誰かの声が聞こえた。
それに合わせて、人の足音が聞こえてくる。車掌さんでも来たのだろうか？
「う～、ここには誰かいるデスかー」
入って来たのは、女の子だった。
少し離れているから顔はよくわからないが、長く黒い髪をおろした、僕と同じくらいの年頃の女の子みたいだ。
失礼ながら顔を良く見させてもらうと、随分と整った顔立ちをしていた。あまりの女の子と付き合いの無い僕だけど、まちがいなくかわいい子、と言える顔だと思う……けれど、どこか違和感がある。
何が引っ掛かってるんだろう……まあ、原因は服装だな。
彼女、なぜか和服を着ている。年頃の女の子が和服を着てこんなローカル線に乗っている。趣味なんだろうか？
「暑いデスし、お腹すいたデスし、人は居ないデスし、クーラーは利いてないシ、酷いデスよ……」
愚痴りながら彼女はこちらに近づいてくる。しばらく歩いたところで、こちらの視線に気がついたのか、駆け寄って来た。
「誰も乗っていないと思ったデスけど、ちゃんと人がいるんデスね」
さり気なく失礼な事を言う子だ。けど、その顔にはまったく嫌味がない。多分、思った事をそのまま言ってしまったんだろう、なんだか憎めない。
「うん。まあ、僕もついさっきまで誰も乗っていないと思ったけどね」
ほんと、この線に乗った時から、他の乗客なんて見なかったし。

「ほんと、田舎だよね」
「あー、失礼デスよ、ここに住んでる人が聞いたら、怒りますよ！」
「いや、さっき君も似たような事言ってたでしょ」
「それは気にしなでください」
　気にしてください。
「まったく……」
僕とは初対面だってのに、よく喋る子だ。人見知りとかはしないタイプなんだろうか。
「でも、よかったデス。今まで誰もいなくて退屈デシたよ」
まあ、これだけ喋る子だったら、誰もいない車内で一人、椅子に座り続けるのは辛くて仕方ないだろう。
「こっちも、妹が寝ちゃって寂しかったから。話し相手くらいにはなるよ」
「はい！　ありがとうデス」
にぱーっと、笑顔になる。口だけじゃなくて、表情もよく変わる子だ。
「まだ名乗ってなかったね。僕は上凪悠斗。隣で寝てるのは美優。僕の妹だよ」
「ワタシは、キラボシケイです」
「キラボシ……なんだよ、その名前。日本人の名字じゃないし、英語の名前でもない」
「ええとですね、こう書くんです」
そう言うと、ケイはカバンからメモ帳とボールペンを出して、文字を書き始めた。
スラスラとペンを動かし、随分と達者な漢字で綺羅星と書く。なるほど、そんな字だったんだ。
「はい、これがワタシの名前です」
綺羅星ケイ、本当に珍しい名前だ。最近の親は、こんな無茶苦茶な名前をつけるんだろうか。
そう言えば、近くで見てみると、彼女の目は碧眼だった。髪の色こ

そ日本人のように黒いけれど、顔立ちはどことなく、外国人の物だ。
それに、日本語のイントネーションも、どことなくおかしい。
「あのー、顔を眺めてどうしたんですか？」
「あ、ごめん。青い目の人って今まで見たことなかったから、つい見ちゃって」
我ながら、失礼な事をしたものだと思う。
「あ、気になったんだけど、君って、ハーフなのかな？」
恥ずかしさを紛らわすために質問を続けた。声がちょっと上ずっていたけど、緊張しているのはばれてないはずだ。
「はい、パパは日本人デスけど、ママはイギリスの出身デス！」
と、言う事は、ハーフか。
「なるほどー、だから、日本人の黒い髪と、イギリス人の青い目を持っているんだ」
「はい、そうデス！　パパとママから貰ったものデス」
そう言って、誇らしげに笑った。
その顔を見て、改めて思う。彼女は、笑顔の良く似合う子だ。
「でも、そんな格好して電車に乗って、どうしたの？」
趣味は人それぞれだと思うけれど、年頃の娘さんが和装を普段着にするのはあまり見ないし、なにより長旅には不向きな気がする。
「これから、大事な人に会いに行くので、気合いを入れました！」
胸を張って、彼女は応える。
「気合いね」
まあ、確かに身体全体からピリっとした空気を感じるし、気合いが籠ってるんだろう。
「んにゃ？」
気がつくと、隣で美優が目覚めていた。寝ぼけ眼で当たりをきょろきょろと見回すと、自分のすぐそばに座ったケイを見て、驚いたように目を広げる。
「お、お兄ちゃん、この人だれ？」
「ケイさんだって。偶然、同じ電車に乗ったけど、お互い、話相手

がいなくて暇だったから、こうして話をしてる」
僕が一気に説明する横で、ケイさんはひたすら首を縦に振り続けている。肯定の合図なんだよね、たぶん。
「ミユ。ケイですヨ、よろしく」
「ふえ？　なんでお姉さん、私の名前を知ってるの？」
「ああ、ごめん。僕が教えた」
「もう、だったら起こしてくれればよかったのに」
美優は、頬を膨らませて機嫌の悪さをアピールしてくる。
「ミユ。ユートは、よく寝ているアナタを起したくなかったんデス。許してあげてください」
「うー、わかったよ」
ケイのフォローに納得したのか、美優は大人しくなってくれた。
「そういえば、二人はどうしてこの電車に乗っているんデスか？」
「あ、えっとね。星空町に居る、お爺ちゃんにあいに行くためだよ」
「わお、奇遇ですね。ワタシも星空町まで行きますよ」
「へえ、それじゃあ、そこまで一緒だね！」
「はい、よろしくです、ミユ」
お互い、気が合うのか、美優とケイはそのまま星空町につくまで、ずっと談笑をしていた。
こう言う時、男の僕は妙に会話に入り辛くて、時々振られる話題に返答をしながら、会話を聞いていた。
少し寂しいけれど、美優が退屈しないで済むのは助かった。たぶん、僕が美優の相手を一人でするのは、ちょっと難しいだろうし。旅先の出会いに感謝しよう。

さて、そんなこんなで、僕たちは星空町に着いた。
電車を降りると、そこは時代を感じさせるホーム。木できた壁や屋根には汚れが目立ち、人の数も少ない。
「わお、写真で見た事がありますよ、これが田舎なんデスね」
「うん、私もここまで田舎を見るのって、初めて」

女二人は口をそろえて失礼な感想を出している。お前ら、地元の人間が聞いたら怒るだろ。
「美優、忘れ物は大丈夫？」
「うん、大丈夫」
美優は既に荷物を纏めて改札まで歩き始めていた。話が妹ながら、行動の早い。
「んじゃ、行こう」
「あ、ワタシも途中まで一緒に行きます！」
僕達の後ろを、あわててケイが追いかけてくる。
「どこまで行くんだっけ？」
「ええと、地図があるんデスけど」
そう言うと、ケイは一枚の紙を取り出した。そこに書かれているのは、この町の簡単な地図だった。
「この丸印が付いているところが、目的地なのかな？」
「はい、そうです」
「これだったら、お爺ちゃんの家の途中だから、一緒に行けるね！」
「うん、そうだね。それじゃあ、ケイも一緒に行こう」
「はい！」
そう言うわけで、三人揃って僕たちは駅の改札を抜けた。
改札を抜けると、そこは十年くらい前に戻ったような、田舎町だった。
道路はコンクリートで舗装されているが、どことなく色あせていて、年季を感じさせる。
駅前こそ小さな店がいくつか並んでいるが、少し歩けば家がまばらになり、道路のわきには空き地が目立つ。
道路のわきには雑草が生い茂り、よく見るとバッタやカマキリがいた。
建っている家もまばらで、一つ一つの家の間隔も、東京都は比べ物にならないくらい広い。
車が通る音や、工事の騒音もなく、ただ蝉の声だけが鳴り響いてい

る。
「ここに来るのも久しぶりだけど、やっぱり東京とは違うなあ」
「うん、空が広いよね」
確かに。高い建物もないし、そもそも視界を遮るものがないので、空が広く感じられる。
見上げると、空には雲ひとつなく、太陽からの夏の日差しが降り注いでいた。
さすがに少し暑いけれど、不快さはない。
「ここが、日本のフルサトなのですね」
「まあ、よくテレビとかでそう言う紹介はされるかな」
故郷。
確かに、僕達がイメージする故郷と言うと、こう言う光景を思い浮かべるのかもしれない。
「あ、見てみてお兄ちゃん。これ、バッタだよ」
美優は道路わきの草むらに指差して走って行った。そう言えば、最近は家の近所じゃ、バッタもあんまり見なくなったからなあ、珍しいんだろう。
「ほら、捕まえた！」
素早くバッタを捕獲すると、美優はそれを持ってこちらまで戻ってくる。
「へえ、捕まえるの、上手いな」
僕だって、虫取り網がないと難しいのに、手づかみで随分と簡単に捕まえられるものだ。
「ケイさん、ほら見て」
「あ、あのー。ワタシ、虫はちょっと」
捕まえた虫をケイに見せようと近づく、美優に、ケイは少しひきつった顔で後ずさる。
「虫、苦手なの？　可愛いのに」
さも不思議そうな顔で美優は言うけれど、反対にケイは、なんでこんな気持ちの悪い生物を可愛いと言えるか、心底不思議そうだった。

「ほら、人が嫌がる事をしちゃダメでしょ」
流石に気の毒なので、助け船は出す事にしよう。
「あ、そうだったね。ごめんなさい、ケイさん」
謝ると、美優はすぐにバッタを草むらに放した。それを見って、安心したのかケイは美優の方にまた近づいていく。
「ビックリしました。美優は、虫が怖くないんデスね」
「えっへん、小さい頃はお兄ちゃんと一緒に虫取りしてもんね」
胸を張って、美優は言う。
「うん。そう言えば、最後にやった時は、美優の方が沢山捕まえてたよね」
流石に僕が中学生になった頃にはもうやらなくなったけれど、昔は兄弟してあちこち駆け回っていたものだ。
今は、虫を探していた草むらにも家がたっているし、バッタを見る事もない。やろうと思っても、出来ないんだろうな。
「ワタシは、虫はダメですね」
「ま、気持ちは分からなくもないよ。僕も最初は苦手だったし、バッタはともかく、毛虫とかはまだ生理的に駄目だな」
「分かります！　ワタシも、あのウネウネした体が大嫌いです」
うん、よくわかる、それは。
「あと、蟻。あれはダメです。絶対にダメです」
「蟻、かあ……」
なんか、蟻に恨みがあるんだろうか、妙に感情が籠っていた。もちろん、籠っているのは、憎しみと言う名の感情だ。
そのままお互い、毛虫は駄目だとか、蛾も嫌いだとか、でも芋虫は大丈夫……と言ったところでケイに否定されたりしながら、田舎の道路を歩いて行った。
通る車も一つなく、時々自転車に乗ったおじさんやおばさんが、こちらを見て挨拶をするくらいで、長閑な道だった。
ケイは虫が苦手なのか、道路の端には決して寄ろうとせず、真ん中をキープして歩いていた。

対象に、美優は面白そうなものが見つかると草むらに突っこんでいき、何かを捕まえてはケイに気味悪がられていた。
３０分ほど歩くと、ひときわ大きな家が見えた。お屋敷って言う言葉が似合いそうな、古い日本家屋だ。確か、地図で見せてもらったケイの目的地は、あの家の筈だ。
「ケイ、あそこが君が行くところだっけ」
「はい、間違いなさそうです」
地図を開いて再確認し、ケイは首を縦に振って肯定した。
「それじゃあ、私達とはここまでなの？」
残念そうに、美優は言う。まあ、短い間だったけど、随分仲良くなったから、名残惜しいのだろう。
それは、僕も同じだ。
「あはは、ごめんなさい、ミユ」
ケイの方も同じように、別れるのが少し寂しいようだ。
「でも、僕達は夏祭りが終わるまでここに居るし、ケイもすぐに帰るってわけじゃないでしょ？　だったら、会える機会は何時だってあるはずだよ」
「そうですね。ミユ。明日にでも、また会いましょう」
「うん」
うん、二人とも納得してくれた。
　ケイはそのままお屋敷の方へ走って行った。
「またねー」
美優は、ケイがお屋敷の中にまで入るまで手を振っていた。
「じゃ、行こうか」
「うん……はあ、ここからはお兄ちゃんと二人旅かあ」
さも不安であるかのように美優は言うと、僕より先に歩きだした。
「はいはい、僕も美優と二人で残念ですよ」
お互いに軽口をたたきあい、僕も美優の後を追う。
その最中、二人とも特に何も言わずに歩いた。
僕と美優の二人だと、あんまり話題がない。やっぱり、ケイが居て

くれて随分と助かったのだと実感する。辺りには相変わらず蝉の声だけが響き、少し寂しいくらいだ。
「この不届き物があ！」
その静寂を打ち破るかのように、突如怒声が響いた。
真後ろから聞こえてきた大きな音に、僕は思わず後ろを振り返る。
僕と同じように美優も驚いたようで、心配そうな顔でこちらの顔を見てくる。心なしか、周りの蝉の鳴き声も低くなり、明らかに今までとは異質な空気が僕達の間に漂う。
「ねえ、お兄ちゃん。今の声って、ケイさんが入った家から聞こえてきたよね」
「ああ、まちがいない。」
そもそも、人もいないし建物もないし、あそこから聞こえてきたとしか思えない。
「美優、行くか？」
あまりにも突然の怒声。それに、聞こえてきた場所。何となくだが、不安を感じて、僕はその正体が何であるか、確かめたくなった。
「当然だよ、お兄ちゃん」
僕からの提案に、我が妹は頼もしい返事を返してくれる。
お互いに顔を見合わせ、首を縦に振ると、すぐさまお屋敷へと駆け出した。

お屋敷の門は、不用心にも開かれたままだった。
「ねえ、入って大丈夫かな」
おそるおそる、中をのぞきながら美優は言う。
「うーん、勝手に入っちゃまずいよな」
流石に、見ず知らずの人間が中に入ったら、面倒な事になる。それに、さっきの怒声は、不届き者と言ったが、仮に不審者がこの中に居るのなら、美優を連れて行くのは明らかに危険だ。
「大丈夫だと思うけどー」
「やめなさい」

軽く悪い事を言う美優を止め、僕はとりあえず門の周りを見回す。インターフォンでもあれば、中に連絡を取れるのだけど、残念な事にそれらしきものは見当たらない。
　気になるところと言えば、門の横にかけられた表札くらいか。
「綺羅星……か」
ケイと同じ名字だ。と言う事は、ここはケイの家、もしくは親戚の家なんだろうか。
「馬鹿もの！　何故今さら帰って来た。貴様の父は、一体どういう教育をしてきたというのだ」
「ごめんなさい！」
再び、お屋敷の中から人の声が聞こえてきた。一方は、さっき聞こえてきた怒声と同じもの。もう一つは――
「お兄ちゃん、ケイさんの声だよ！」
そう、ケイの怯えたような声だった。
「美優、行くぞ」
「合点承知、だよ！」
うむ、やはり我が妹、こう言う時は意見が一致してくれて頼もしい。不法侵入。二人でやれば怖くない！
　僕たち兄弟は、門の中へと駆けて行った。

お屋敷の門を抜けて、庭を抜けると、門の前ではケイと、巨躯の老人が対峙していた。
とはいっても、血走った眼でケイを睨みつける老人と、怯えたように顔を伏せるケイは、とても対等に対峙しているとは思えなかった。
「貴様ら、何者だ！」
走って来た僕達に気がついたようで、老人は血走った眼を僕達に向けて怒鳴った。その声を聞いた時、体全体が震えるような感じがした。思わず、そのまま謝って逃げ出したい気分になるけれど、歯を食いしばってその場にとどまる。美優も、僕の後ろに隠れながらだけれども、しっかりとその場に残ってくれている。

「見ない顔だが、勝手に人の家に入るな！」
声のトーンはいくらか抑えているけど、怒り心頭といった様子で老人は僕達を睨みつける。美優は僕のシャツの裾をきつく握り、どう考えても怯えていた。正直、僕も怖いけれど、兄貴として踏ん張らなければならない。
「勝手に入ったのはすいません。尋常な様子だったので、何か大変な事があったかと思い、来ました」
「ふん、野次馬か」
ああ、まあそうとも言えるよね。思わず苦笑い、ただし心の中だけで。
「……その、上凪悠斗です。野次馬と言われても仕方ないですけれど、誰かが怪我でもしたんじゃないかと、心配だったんで」
「なるほど」
ジロリと、老人はこちらの顔を睨みつけてくる。思わず目をそらしてしまいそうだが、ここで目をそらすのも癪だ。大体、僕は嘘は言ってないんだ、ここで怖気づく必要なんてない。怖いけれど、僕も相手の顔を見続けた。
「なるほど、思ったより度胸はあるようだな。信じてやろう」
そう言うと、老人は僕から視線をそらした。緊張が解けたのか、背中から冷や汗が流れてくる。美優もシャツを握る手を緩め、前の方に顔を出した。
「……ケイさん、大丈夫」
恐る恐る出した美優の声に、今まで下を向いていたケイはこちらを向く。その顔は、今にも泣きだしそうだった。
「なんじゃ、お前らは娘の知り合いか」
「はい。今日知り合った程度ですけれど」
「なら丁度いい、こいつをつけて、さっさと出て行け！」
そう怒鳴りつけると、反論すら与える暇なく、老人は立ち去ってしまった。
残されたのは、僕と妹。そして、今にも泣き崩れそうなケイだった。

相変わらず蝉の鳴き声だけが辺りに響いていた。僕たちは、誰とも言わずにお屋敷を出て、また岩三郎おじさんの家へと歩き出した。三人揃ったけれど、空気は重く、誰も口を開かずに、暫くただ歩き続けた。

「その、ごめんなさい」

その沈黙を破ったのは、ケイからの謝罪だった。

僕たちは歩くのやめ、ケイの顔を見る。

その顔は、相変わらず沈んでいた。

「……別にいいよ、僕たちだって勝手に突っ込んだだけなんだから」

そう、勝手に首を突っ込んだだけだ。

「うん、悪いのはあのお爺ちゃんだよ！」

美優もケイを励ますように、同意してくれた。

けれど、ケイは首を横に振って、小声で語り始める。

「違うんデス。あの人は。光太郎おじさんは、悪くないんです」

あの爺さん、光田って言うのか。綺羅星光太郎……変な名前だ。

「……あの爺さんって、ケイの親戚か？」

「はい」

やっぱり、そうだったか。

「何かあったの？」

聞いてはいけない気がしたが、このまま黙っているだけと言うのも、彼女には辛いだろう。誰かに話したら、少し気がまぎれるかもしれない、聞き手になるくらいは、僕にだってできる筈だ。

「ワタシ、ハーフなのはもう話しましたね」

「うん、電車の中で聞いた」

「青い目って、珍しいもんね」

まあ、日本で暮らしているうちは、なかなか見ないよね。

「実はですね。私のパパは、この町の出身なのです。」

「それで、その実家がさっきの家ってわけか」

その言葉に、ケイは首を縦に振って肯定する。

「ワタシのママがイギリス人デス。パパは、結婚する時、お母さん

を紹介したところ、外国人の娘に父と呼ばれたくない、と言って、反対したそうなのデス」
なるほど、あの爺さん、明らかに頭が堅そうだし、自分の息子が外国人と結婚するなんて、認めなかったんだろうな。
「もちろん、パパとママも必死に説得しました。でも、お互いに結局認められなくて、結婚するのを認めるかわりに、パパとママは、町から追い出されたのです」
勘当か、そういう事情があった訳か。
「そんなの、ケイさんは悪くないよ！」
耐えかねたのか、美優は叫んでいた。
「いえ、光太郎お爺さんが怒るのも無理はないデス。何年も前に家を出た息子の孫が、突然現れたのですから」
確かに、結婚をするために家族の縁まで切ったと言うのに、今更になって、あなたの孫です、と見ず知らずの人間が現れるのだから、心中は複雑だろう。
「そう……かな」
納得しかねると表情で、美優は黙ってしまう。
「……ケイさ、これからどうするの？」
「どうしましょう」
途方に暮れた顔で、ケイは空を見上げる。よく見えないけれど、その顔は苦笑いしているようにも見える。
「ねえ、だったら岩三郎おじちゃんの所に行こうよ！」
そんなケイに、美優は励ますように声をかける。
「電車の中で話したよね。僕達が夏休みの間、厄介になる家の事」
「は、はい。でも、いいのですか？」
「大丈夫だよ。ケイさん、私たちのお友達だもん、きっと許してくれるよ！」
ケイの不安を吹き飛ばすように、美優は不自然なくらい明るく言う。
「そ、僕達、友達でしょ。困った時は、お互い様だよ」
ケイは、暫くの間、僕達の顔を黙って見つめていた。

その時間が、何分続いたろう。僕達には、とても、長い時間に感じられた。
「ふふ……」
それを破ったのは、ケイの声だった。
「はい。お2人とも、よろしくお願いしますよ」
そして、再び僕達に笑顔を向けてくれた。
「うん！」
同じように、美優も最高の笑顔を返す。よかった、少しは元気になってくれたかな。だとしたら、少しだけ、嬉しいかな。
そう考えている僕の顔も、きっと笑顔なんだろう。

「がっはっは、まったく問題はない！」
岩三郎おじさんは、快くケイの事を受け入れてくれた。
あれから数十分、僕たちはひたすら歩き続け、岩三郎さんの家へとたどり着いた。さすがに最後の方は、美優もケイも疲れて口数が少なくなっていたけれど、まあ無事にたどり着いて良かった。
「やった、岩三郎おじちゃん、大好き！」
まあ、疲れていたはずなのに、美優は元気よく岩三郎おじさんに抱きついている訳だが。と、言うか岩三郎おじさん、年甲斐もなく顔がにやけてますよ。おばさんが来るよ。
「よかった。ここに泊れなかったら、ケイが行く場所が本当に思い浮かばなかったからさ」「がはっはっは、ワシが年頃の娘さんを放っておくわけ無かろうが」
「ほらほら、下らない事を言ってないの」
ほら、調子に乗っていたらおばさんが来ちゃったし。おばさん……月夜おばさんは、岩三郎おじさんの妻だけど、相変わらず元気そうだ。頭はもう白くなって、顔も皺だらけだけど、表情は精悍そのものだし、生気が宿っている。
「おばさん、久しぶり！」
荷物を下ろし、僕たちはこらからお世話になるおばさんに挨拶する。

「あら、こちらこそ久しぶりね、悠斗ちゃん」
「何年ぶりでしたっけ？」
確か、前にあったのは中学生の頃だったはずだけど。
「それにしても、少したくましくなったわね、悠斗ちゃん」
「そうだったら、ちゃん付けはやめてくれよ」
僕、高校生だから、さすがにちゃん付けは少し恥ずかしいなあ。
「がはは、それはワシくらいになってから言うもんじゃ」
筋肉隆々の体を見せつけ、おじさんは高らかに笑う。その体からは、とても年齢が五十過ぎとは思えない力強さを感じる……そこまでなるのは、さすがに厳しいなあ。
「あ、あの……綺羅星ケイデス。よろしくおねがいします」
「あら、悠斗の友達って、綺羅星さんのお子さんなのかしら。だったら、私達の家じゃなくて綺羅星さんの家に泊らないの？」
「それは……」
おばさんの当然の質問に、ケイは言葉を詰まらせる。無理はない、言いづらいだろうな、家に帰れない事情ってのは。
「婆さん、綺羅星の子せがれがこの町を出る時、騒ぎがあっただろう」
どうやら、おじさんはある程度は事情を理解しているようだ。
「あら、そうだったわね。ごめんなさい」
あわててておばさんも訂正する。ケイは、気にする事はないと笑って、そのまま話を打ち切った。

翌日、僕はこの町へ来た当初の予定通り、夏祭りの手伝いをする事となった。
朝食を食べた後、学校に行くよりも早い時間に家を出たのだけど、祭りの会場となる町の中央にある公園には、多くの男が集まっていた。
僕ぐらいの年齢の男は居なくて、ほとんどが四十台。若い人でも、二十代くらいの人しか居ない。ちょっと肩身が狭かったけれど、み

んな、若いのに感心だと褒めてくれた。まあ、半ば強制的に来る事になったんだけどね。
「おーい、少年。テントを建てるから少し手伝ってくれ」
陽に焼けた肌の、たくましいお兄さんが僕を呼んでいた。また仕事だ。朝からあっちこっちを手伝っているけれど、全然終わる気配がない。
夏の日差しがジリジリ降り注ぎ、シャツは汗を吸って少し濡れている。予想以上にハードだ。
「はい」
とはいっても、ここに来た以上はしっかりとしなければいけない。僕は返事をすると、すぐさまお兄さんの元へ駆け寄って、指示を受ける。
「うおーい、ちゃんと固定しねえか！」
「うるせえよ、てめえみたいな馬鹿力じゃないんだよ！」
「ああん、てめえが貧弱なだけじゃねえか！　もっと肉を食え、肉を！」
後ろでは、岩三郎おじさんが、年下の連中を集めて何やら大きな物を作っていた。どうやら、結構難航しているようだ。何かの材料なのか、岩三郎おじさんは自分の身の丈ほどもある木材をかついでいる。すごい重そうだ。
日に照らされて、岩三郎さんの体を覆う筋肉が輝いていた。男らしい口調と相まって、実にたくましい。
「いいなあ、あの筋肉」
隣でお兄さんがうっとりした目をし、頬を染めながら何かを言っているが、気にしないでおこう
　そんなこんなで、僕が星空町に来て二日目は、あっという間に過ぎて行った。
　元々気のいい人たちばかりなのか、昼食の時間頃には、僕を長年の仲間のように、親しげに話しかけてくれるようになった。正直、最初は知り合いも岩三郎おじさんだけで、上手くなじめるか心配し

ていたけれど、変に構える必要はなかったんだ。
僕は、そのまま町の人たちと一緒に夏の日差しの下、汗を流しながら同じ仕事を続けた。
時折吹く風が涼しくて、妙に心地よい。
遠くから聞こえる蝉の声も、僕たちを応援しているように聞こえた。
気がつけば陽は落ち、辺りを夕闇が覆い尽くそうとしていた。
「いよーし、今日はこれまでだ！」
全体の仕事が一段落したところで、岩三郎おじさんが今日の終わりを宣言し、解散となった。
「んじゃ、お疲れさん」
「明日も頼むぜ」
皆も帰り支度をし、別れのあいさつを告げると、それぞれの家へと帰って行った。
「ほら、ワシらも行くぞ」
岩三郎おじさんは、僕の方に近づくと、そう促した。
「うん、早く帰ろう」
もう陽は落ちている、じきに暗くなるだろう。そうなったら、ここは田舎町。明かりも少なくて、暗闇の中歩いて帰るのは、しんどそうだしね。

「あ、おかえりなさい、お兄ちゃん」
「お帰りなさいデス、ユート」
家に帰ると、美優とケイが出迎えてくれた。
ケイは流石に昨日のように和装でなく、動きやすいラフな服装になっていた。
そういえば、今日は二人で町を歩くって言ってたし、動きやすい格好に着替えたのかな。
「がははは、やはり若い娘の出迎えはいいもんじゃあ！」
幸せそうな顔で岩三郎おじさんは笑っているけれど、台所の方から

月夜おばさんの刺すような視線を感じるのは、気のせいだろうか。
空耳だろうか、私があと十歳若かったら……と言う妙なつぶやきまで聞こえてきたけど、まあ、気のせいだろう。だから包丁を置いてください、おばさん。
「おばーちゃーん、お兄ちゃんたちが帰って来たよ。ご飯にしよう」
「はいはい、わかりました」
晩御飯か。そういえば、今日は随分とお腹が空いたな。
そんな事を考えたら、急に腹の虫が鳴いた。

居間に入ると、既に食事が用意されていた。
今日の料理は肉じゃがに、山菜の味噌汁、それと良く分からない魚の焼き物だった。
「うえー、お魚嫌いなのに」
魚を見て、美優はあからさまに不満の声を出す。
「こら、ちゃんと食べろと母さんにも言われてるだろ」
「だって、骨が多くて食べづらいんだもん」
「それは分かるけど、出されたものはちゃんと食べなさい」
「そうですよ、ミユ」
不満を言う美優に対して、ケイも諭すように言ってくれた。
「うー、わかった」
まだ不満そうだけど、納得はしてくれたようだ。
「家の婆さんの魚料理は天下一品じゃ、安心せい」
「あらやだ、もうお爺さんなのに、私を口説いても仕方ないでしょうに」
そう言うおばさんも、言われて嬉しいみたいだけどね。
「さて、それじゃあ、食うか！」
「「「「「いただきます」」」」」
岩三郎おじさんの言葉を合図に、皆一斉にご飯に箸をつける。
「あ、美味しいかも！」
美優は、魚を口に入れた途端、今までの不満は何だったのかと思う

くらい、嬉しそうな顔をした。
「な、言っただろ」
「ああ、うん」
お婆ちゃん、本当に料理が上手だなあ。
「ところでさ、お兄ちゃん。お祭りの準備はどうだった？」
「ああ、最初はちょっと辛かったけど、町の人はみんな良い人だったし、楽しかったよ」
結構疲れたけれど、この疲れも心地よいし。
「ふうん……そうなんだ」
僕の答えに、美優は何か不満そうだった。何だろう、名に買ったのかな。
「美優、そういえば、ケイと町を回ったって聞いたけど、どうだったの？」
二人で遊んでいたみたいだけど、楽しかったのかな？
そんな僕の質問に対して、美優は苦い顔をした。
「それは……」
何かを言いたそうだったけれど、思いとどまっているようだ。
「ケイ、何かあったの？」
同行していたケイだったら、何か知っていてるかと思い、ケイの方に聞いてみた。
「それは……」
だけれども、ケイも顔を曇らせていた。
「そっか……」
何か、やっぱり嫌な事でもあったんだろうか。
「なんじゃあ、二人して暗い顔しおって。飯食え！　飯食えば、元気になる！」
そう言うと、岩三郎さんは茶碗を持って台所へ移動する。たぶん、米のおかわりだ。
岩三郎おじさんが居間を出て行くと、何とも言えない重い空気が流れ始めた。不味い、ここは僕がなんとか面白い事を言わないと！

と意気込んでみても、すぐには言葉が見つからない。
「あー、お婆ちゃん、肉じゃが美味しいっすね！」
「あらそうかい、ありがとうねえ」
「……」
「……」
駄目だ、二人は会話に乗ってこない。本気で落ち込んでるな。
美優が落ち込むって、何があったんだろう。
我が妹である美優は、結構タフだ。テストで悪い点を手っても落ち込まないし、嫌な事があったら、ストレートに言う。それが口を濁すって、何があったんだろう。
「失礼しまーす！」
沈黙を破るように、玄関から威勢のいい挨拶が聞こえてきた。誰かが来たようだ。
「あら、ちょっと行ってくるわね」
月夜おばさんは席を立つと、玄関の方へと歩いて行く。
「あ、僕も」
重い空気に耐えきれず、僕も月夜おばさんの後を追う。僕が行っても仕方はないけどね。

訪問者は、若いお姉さんだった。
「それじゃあ、明日はよろしくね」
「ええ、こちらこそ」
話は短かったらしく、僕が玄関に着いたころには、もうお姉さんは帰えるところだった。
「そういえば……」
思い出したように、お姉さんは付け加える。
「この家に、綺羅星さんの、駆け落ちした息子の子が居るそうじゃない」
少しトーンを落とし、お姉さんは続ける。
「町から逃げ出したのに、なんで戻って来れるのかしらね。ああ、

子供には関係ないのかし」
その内容は、ケイと両親を貶める物だった。
僕は、なんだか居心地が悪くなって、玄関から少し離れた。けれど、話し声は聞こえてくる。
「まあ、この町で綺羅星さんに目をつけられると、ロクな事はないわ。早いうちに、追い出した方がいいわよ」
「考えておくよ」月夜おばさんは、肯定も否定もしなかった。
流石に余計な事をだと思ったか、お姉さんは、言い過ぎたと言って、急いでその場を立ち去ったようだった。
あんまり聞きたくない事を聞いたけれど、これであの二人が落ち込んでいる理由が分かった。
ケイは、この町から追い出された人の子供。
それも、綺羅星さんと言うのは、結構な有力者みたいだ。
だから、町のみんなも事情を知っているし、有力者から煙たがられている人物を、歓迎できない。
今日、町を歩いている間、ケイと美優は、そんな人々の態度を、嫌と言うほど見続けたのだろう。
「ほんと、困ったものよね」
気がつくと、後ろに月夜おばさんが立っていた。
「大丈夫、あの子を追いだすつもりはないから、安心しなさい」
おばさんは、僕に優しくそう言ってくれた。その言葉は、不思議と頼もしかった。
「……ケイ、町に馴染めないのかな」
僕は、すぐに町の人と打ち解けられた、でも、ケイはそう簡単にはいかないみたいだ。
「それは、すぐには答えは出ないわ。さ、行きましょう」
そうして、おばさんは居間へと戻る。僕も、その場で呆けている訳にはいかなかった。すぐに後を追って、居間へと進んだ。
居間には、既に僕以外の四人が揃っていた。相変わらず、ケイと美

優は浮かない顔をしていた。
「おう、おそかったな、悠斗」
「あ、うん」
岩三郎おじさんは、僕が入って来た事を確認すると、この空気に不釣り合いなくらい明るい声で迎えてくれた。
「なんじゃあ、お前までしょげた顔しおって」
やっぱり、顔に出ていたんだ。
「お兄ちゃん……」
「……はあ……」
助けを求めるように、美優は僕を見つめる。視線をケイに移すと、彼女も同じように僕を見ていた。
「あのさ……おじさん」
「ん、なんじゃ」
「ケイのお父さんって、この町で何やったの」
僕の質問に、岩三郎おじさんは、食事の手を止めた。
「禁句だと思うんだけどさ、正直、あんまり今の状態って、良くないんじゃないかと思って」
「知っても、そう簡単には行かんぞ」
おじさんは、厳しい目で僕を見てくる。
確かに、僕一人が事情を知ったところで、どうにかなるものじゃない、けど。
「岩三郎おじさん。可愛い子が泣いてたら、助けたくなるのが男ってものでしょ？」
まっすぐに目と見つめ、僕は歯の浮くくらい恥ずかしい台詞で返す。
「……がはは、それでこそワシの孫だ！」
満足したようにうなずくと、岩三郎おじさんは、口を開いた。
「この娘さんの父親が、この町から追い出されたのは、もう知ってるな」
僕は首を縦に振る。
「その時なあ、息子の方も悔しかったのか、ある嫌がらせをしたん

じゃ」
「パパがですか？」
「ま、まあ。よほど悔しかったんじゃろう。誰にでもある事じゃ、気にするな」
咳払いをして流れを切ると、おじさんはさらに話を続けた。
「まあ、その仕返しが、結構大きくてな、光太郎の奴、あの事件の後、散々喚き散らしてて、町の連中も八つ当たりされるわで、大変だったわけだ」
なるほど、それど、ケイに対してもなおさら厳しい訳だ。
「その、仕返しって何？」
「聞いて笑うなよ……古文書を盗んだのじゃ」
「古文書？」
何か、この町に伝わる重要な文書とか、そう言う物なのかな。
「その内容って？」
「星の巨人の在り処じゃ」
星の巨人、何だろう。
「星の巨人って何？」
僕と同じ疑問が浮かんだのか、美優が聞き返す。
「二人とも、この町に伝わる昔話は知っとるな？」
「うん、お姫様が、空から降って来た人と出会う話でしょ？」
数週間前、母さんに見せてもらった、あの話か。うろ覚えだけど、内容は覚えている。
確か、国を追われた姫が死を覚悟した時、空から降ってきた光。それが星のように見えて、中から人が出て来た。
「その中で、空から落ちてきた星……それが、星の巨人と呼ばれていて、この町に封印されているそうじゃ」
なんか、一気に胡散臭くなってきた。
「いや、それってただの昔話じゃない？」
「あのなあ、お前が準備してる夏祭りは、その星の巨人がこの地に落ちて来て、町が出来た事を祝う話だぞ」

ああ、そう言うお祭りだったんだ、なるほど。
そういえば、準備の時に『これが星の巨人じゃー！』とか言いながら、巨大な人形を運び込もうとしてたおじさんが居たな。もちろん門前払いを食らったけど。
「しかも、今年は町が出来て五百年。記念すべき年だからこそ、星の巨人を探そうと思っていたが……その手掛かりがなくて、光太郎は苛々しとる」
「なーるほど」
まあ、町に伝わる大事な書物を盗んだのなら、怒るよな。
ケイやあの爺さんにしてみれば、えらい迷惑だけど、息子さんにしてみれば、してやったりってところか。
「あ、あのお……」
一通り話が終わった後、ケイは挙手をして、申し訳なさそうに口を開いた。
「その本……ワタシ、持ってます」
「「なにい！？」」
僕と岩三郎さん、二人で見事にハモッて驚いた。
「待っていてください」
ケイは古文書を持ってくると付け加え、急いで居間を出て行った。
岩三郎おじさんは、目が点になって呆然としていた。
暫くすると、ケイが慌てて居間に入って来た。その手には、確かに古めかしい本が握られていた。
「これが、皆さんが言っていた古文書です」
まだ片づけられていない食卓の上に、静かに本を置く。見れば見る程、古い本だ。表紙に書かれている文字もかすれていて読めない。
「これ、どうしたの？」
「この町に帰る時に、パパから預かりました。パパの代わりに、町に返してほしかったそうです」
なるほど、ケイのお父さんも、この本を持ち出した事が、後ろめたかったのかもしれない。

「でも、だったら直接渡せよ……」
思わず不満が漏れてしまったが、まあ、人には人の事情があるんだろう。
「これ、お爺さんに返せば、大丈夫ですよね！」
ケイは、嬉しそうに言う。
「でも、あの爺さんが素直に受け取るかな」
正直、昨日の様子を見る限り、取り合ってくれそうにないかな。
「……ふーむ、どうしたものかな。確かに奴だったら、信用せずに偽物とか言いかねん」
岩三郎おじさんも、素直に受け取ってもらえるとは思っていないようだ。
「だったらさ！」
机をたたき、前のめりになりながら、美優は言った。
「星の巨人、探してお爺さんに見せようよ、そうしたら、信じてもらえるよ！」
その突飛な発想に、一度全員が無言になる。
けど、僕はその提案に賛成だ。普通に考えたら、本を返すのが先だ、でも、あの爺さんが素直に言う事を聞くとは思えないし、何より、ひと泡吹かせてやりたい。
それに、ケイが自分で行動して、星の巨人を探し出したなら、あの爺さんだって、ケイの事を認めるはずだ。
「面白い！　手伝うよ、美優」
「さっすが、お兄ちゃん！」
そんな僕たちの様子を、月夜おばさんは、にこやかに見ていた。どうやら、止める気はないようだ。
「がっはっは、それでこそ我が孫よ！」
まあ、この人は言わずもがな。
最後に、僕たちは全員、ケイを見る。
ケイは、不安そうな顔をしていたけれど、意を決したように顔を引き締めた。

「はい、やりましょう、二人とも」
「ああ！」
これで、明日やる事は決まった。星の巨人を見つけ出して、あの爺さんにケイを認めさせる！

翌日、事情を話して祭りの準備を途中でを抜けさせてもらうと、さっそく僕たちは行動を開始した。
ケイが持ってきた古文書は古びて文字も潰れており、とても読めたものではなかった。
けれど、一枚だけ大きな地図が描かれており、その中にはでかでかと×印が付けられていた。多分、そこに何かがあるだろう……と言う、どうにも頼りない確信を持って、僕たちは夏の炎天下の下を歩いている。クソ暑い。
「お兄ちゃん、夏場に長袖長ズボンって、やっぱり間違ってると思うんだ」
「私もそうおもいます！」
女子二人は、さっそくこの暑さにへばっているようだ。
それも無理はない。なにせ、二人ともこの暑い中、腕で脚をすっぽり覆う、丈夫な生地の服を着ているのだから。
僕も似たような格好をしているのだけど、正直、今すぐ脱ぎたい。
ついでに、荷物が詰まった背中のリュックを下ろしたい。
「仕方ないよ、森に入るんだからさ」
思わず同意してしまいそうだったが、こらえて二人に言った。
こんな恰好をしているのには、ちゃんと理由がある。
地図に書かれていた場所は、町からそう遠くない山の麓だった。地図上の距離はそれほどでもないのだけど、問題はそこに通じる道がない事だ。
道がなければどうやって行くのか、それは簡単だ、道の無い場所を歩けばいい。今回は森を突っ切る事になる。
「森の中はさ、突き出した木や、虫たちがいるから、なるべく素肌

は保護しなきゃダメだろ」
夏らしく、半袖半ズボンで森に突っ込もうものなら、出る時には、傷と虫さされだらけになっているだろう。
「うー、わかってるよ、お兄ちゃん」
「まあ、文句は言いたくなるよな」
「二人とも、ごめんなさい」
別にいいって、そう、小さく応えて、僕らは美優の背中を押す。
「うん、私も大丈夫だよ」
そう言うと、足早に先へと進んでしまった。
「さ、行こう。美優一人だけで、先に行かせるのは不味いでしょ」
「は、はい」
「それにさ、僕らも何だかんだで、楽しみにしているんだから、謝らなくていいよ」
暑い事には変わりない。けど、標高何千メートルの高山や、人が足を踏み入れないような密林に挑む訳じゃないんだ、森林浴とは行かないだろうけど、森歩きを楽しむくらいの気構えはある。
「はい！」
　そんなこんなで、僕たちは夏の田舎道を歩く。
時々通りがかる人が、この陽気に似つかわしくない暑苦しい格好を見て、苦笑いをするのを、僕達も苦笑いで返し、進んでいく。
時折、ケイの顔をして渋い顔をする人が居る。そのたびに、美優とケイは少し顔をゆがめるけれど、僕が心配そうに顔を見ると、すぐに何もなかったような顔をする。思わず、苦い顔した連中に文句を言いたくなる。でも、僕が言うわけにはいかない。
二人は昨日、このような態度とる人たちに、何度も出会ったんだろう。その度に我慢をしていたんだ。僕が怒ってどうするんだ。
そんな事を考えていたら、二人が心配している顔で、僕の方を見ていた。いけない、顔に出ていたみたいだ。
「大丈夫だよ、なんともない」
本当は、ちょっと心の奥に引っかかりを感じていた。

「そうですか、なら、いいのですけど」
そんな僕の心の中を知っているのか、ケイの声にも、何か影があるように感じた。
「ねえ、ケイ」
「はい？」
「昨日さ、僕、夏祭りの準備を手伝ってたのは、知ってるよね」
「はい、そうですけど」
昨日、僕は夏祭りの準備をして、美優とケイは二人で町のあちこちを歩いていた。
「あのさ、夏祭りの準備って、結構大変なんだ。テントを建てるにしても、提灯を飾り付けるにしても、一人じゃ出来ない」
「は、はい」
「それに、すっごい疲れる。昨日の夜、久しぶりにぐっすり寝たよ」
「お布団に入ったら、すぐに寝息が聞こえてきたもんね」
夏の炎天下、彼方此方をかけずり回り、とにかく疲れた。
「この町の人ってさ、この疲れて大変な事、毎年繰り返してるんだってさ。それも、町中の人が一つになって」
疲れたのは、僕だけじゃないはずだ。祭りの準備をしている人の中には、体力が衰えている老人もいた。
「どうしてかって、聞いたら、こう言ってた。昔、父さんや母さんが準備をしてくれた祭りが、楽しかったから、自分達も同じように、子供たちを楽しませたいって」
「……」
ケイは、僕の長い言葉を黙って聞いている。
「みんな、悪い人じゃないんだよ。ただ、最初のコンタクトが最悪がだっただけで」
町の権力者から嫌われてるなんてわかっちゃ、歓迎なんて出来ないだろうしね。
「町の人が楽しませたい『子供』ってのに、ケイも含まれてると思う。難しい事を言うけれど、この町の人の事、あんまり嫌いにならら

ないで欲しいんだ」
僕は、この町に住んでいる訳じゃないから、住んでいる人がどんな人かは知らない。でも、岩三郎おじさんはいい人だと知っているし、昨日接した人たちも、けっして悪い人じゃなかった。
なにより、ここはケイのお父さんの故郷だ。自分の親の故郷の事を、嫌いになってしまうのは、悲しい事だと思う。
「大丈夫だよ、お兄ちゃん。私たちだって、わかってるよ」
僕の不安を吹き飛ばすように、美優は強い返事を返してくれた。もしかしたら、空元気かもしれないけれど、心強い。
それは、僕にだけじゃない、ケイにだって、その言葉が頼もしく聞こえただろう。
「ユート大丈夫ですよ！」
美優の元気が感染したのか、ケイも力強く答える。
「ずっと、パパから聞かされてました。この町に住んでいた時の事。何度も聞かされて、ワタシもずっとここに来たかったんデス。今は少し不安ですけど、大丈夫です。この町の事、好きになれると思います」
虫が多いのは，少し嫌ですけど、そう付け加えて、ケイは再び歩き出した。当然のように、僕達も一緒に歩き始める。
「あれ？」
と思ったけれど、突然美優が立ち止まって、しきりに辺りを見回している。
「何かあった？」
僕もつられて辺りを見回すけれど、これと言って変な人や物はない。
「えっとね、ケイさんのお爺ちゃんが居たと思ったんだけど、気のせいかな」
あの爺さんか。
美優が見たのが本当にあの爺さんなら、僕たちと顔を合わせ辛いから、咄嗟にどこかに隠れたのかな。でもまあ、あの爺さんなら、正面切って文句を言ってきそうだけど。

「間違いじゃないかな」
「そうかなー、昨日から何度か見かけてるんだけど」
「はい、ワタシも見ました」
腕を組んで考え込む美優に、ケイも同意する。
困ったな、美優だけじゃなくてケイも見てるってことは、本物である可能性が高くなってきた。
って、ちょっと待て、それ以上に、今聞き捨てならない台詞があったぞ。
「え、二人とも昨日から見てるって、どう言う事？」
「はい、ミユと二人で町を歩いている時も、何度も見かけました」
「でも、探そうとすると、居なくなっちゃうんだよね」
昨日から同じような事繰り返してたのか。
「あの爺さん……なんでストーカーみたいな事してるんだよ」
若い女の子をコソコソとつけまわすなんて、爺さん、それはヤバイ、絶対にヤバイ。
「くそう、頑固なだけの爺さんかと思ったら、変態爺だったとは……！」
美優とケイも、その言葉に苦笑いをしていた。少し遠くから、老人の怒鳴り声が聞こえたような気がしたけど、きっと気のせいだろう。

さて、そんなこんなで道を歩いて数十分。町を離れて、道は徐々に細くなっていた。
道端の雑草の数も多くなり、明らかに人が通っていないような、殆ど自然そのままの状態になっている。
周囲を見渡しても人家はなく、そのかわりに森と山がある。と言うか、それしかない。
「そろそろ、森に入るのかな」
目も前の道は、いよいよ深い森の中へと続いていた。地図を見る限り、ここから先は森を突っ切る事になりそうだ。
「うん、大丈夫だよ」

「は、はい」
美優は元気に返事を返すけれど、ケイの返事は歯切れが悪い。まあ、仕方ないよね、絶対に虫が居るだろうからね。
「大丈夫だよケイさん。虫は全部、お兄ちゃんが始末してくれるから」
「……そうですよね」
美優の励ましを聞いても、ケイは不安そうだ。そこまで無視が苦手なのか、過去に何かトラウマ物のイベントがあったんだろうか。と言うか、始末って微妙に言葉が悪いよ。
「とりあえず、もう一回虫よけスプレー、かけとこっか」
僕が背中のリックからスプレーを取り出すと、物すごい勢いでケイは僕の手からスプレーの缶を奪い取り、自らの体にスプレーをかける。
ケイ、必死にやってるところ悪いけど、虫よけスプレーと言っても、蚊とかそういった小さな虫にしか効果がないと思うんだ。
「これで、安心デス！」
妙に満たされた顔をしたケイは僕に缶を手渡した。
ちなみに、中身は当然のように空だった。
「あはははは……行こっか」
呆れたように乾いた笑いを浮かべながら、美優は僕たちに先行して森の中に入って行った。
「あ、待ってよ、一人じゃ危ない」
「いいや、三人でも危ない！」
突然、後ろからしわがれた声がした。
「お爺さん……」
声に振り向けば、そこに居たのはケイのお爺さんだった。相変わらず頑固そうな顔と、ギラギラとした目をしている。ただ、怒りが少し冷めたのか、二日前のような威圧感はなかった。それでも怖いけど。
「ここから先は、森だ。女子供がおいそれと入る場所ではないだろ

う」
「あー、まあ、確かに」
正論である。
「なんじゃ、ハッキリしないな。前にあった時は、もっと毅然としていただろうに」
前は、追い詰められて崖っぷちと言うか、覚悟決まった状態だったんですよ。
「まったく。それに小娘！」
話を振られ、ケイさんは肩を大きく震わせた。まだ爺さんが怖いのだろう、顔を伏せて、相手の顔を見ていない。
「さっさと町から出ろと言っただろうに、なぜここに居る」
「それは……」
ケイは、小さな声で答えた。その声は震えていたし、やっぱり、怖いのだろう。
そんな彼女に対して、爺さんは相変わらず強い視線でケイを睨みつける。孫に対して、この態度はあんまりじゃないか。せっかく遠い場所から来たと言うのに、執拗に追い出す必要はないんじゃないか。
言葉が思わず、口からこぼれそうになった。
けれど、僕が言うよりも早く、ケイさんは顔を上げ、そして、爺さんの顔を睨みつけた。
その視線は、爺さんに負けず劣らず、強かった。
だから、僕は口を開く事が出来なかった。
そうして、二人が沈黙のまま睨みあって、時間が過ぎた。たぶん、一分にも満たない時間だったけれど、とてつもなく長く感じられた。
「ワタシは……」
沈黙を破ったのは、ケイだった。
「パパから任された事を果たすまで、帰れません」
「……そうか」
その言葉に満足したように、爺さんは視線を外し、来た道を戻ろうとする。

「それと、帰ったら、話を聞いてくださいね！」
爺さんの背中に、ケイはなおも語りかける。
「わかった」
それに対して、小さく答えが返って来た。
そのまま、僕とケイは爺さんが見えなくなるまで見送った。
　僕たちは、お互いに何も言わなかった。何か言わなきゃいけないかと思ったけど、僕は上手く言葉が出ない。それは、ケイも同じなようで、辺りには蝉の鳴き声だけが聞こえた。
「ねえ、二人ともどうしたの？」
そこに、何も知らない美優が戻って来た。きょとんとした目で、固まっている僕たちを不思議そうに眺めている。きっと、今の僕たちは、さも可笑しく見えることだろう。
「びっくりしたよ、二人とも、気がついたら居ないんだもん」
一人で先に進んでた美優は、さっきの出来事を知らない。元気に、僕達に先を急かしている。
「はは」
それが妙におかしくて、つい笑ってしまった。
「変なの」
うん、僕もそうだと思う。

第二話　星との遭遇

爺さんが帰った後、何も知らずに戻ってきた美優に、僕達は今までの事情を聞かせた。
爺さんが来たという事で、最初は美優も驚いていたが、ケイがしっかりと反論した事を伝えると、嬉しそうに。
「やったねお姉ちゃん！」
そう、満面の笑顔をしてくれた。
「でも、あのお爺さんが来たなんて、驚いたな」
爺さんがここまで来た事には、美優も驚いていたようだ。
当然、僕も同じだ。
「うん、本当につけまわしてたんだな、あの爺さん」
話を聞いた時は、冗談だと思ってたんだけど……
「でも、次に会った時はお話を聞いてくれるって言いました！、よかったデス！」
ケイは、先ほどまでの緊張とうってかわって、喜んでいた。
そりゃまあ、そうだ。多少なりとも、相手が話を聞いてくれる土台が出来た訳だし。
「でも、これからどうする？」
僕の提案に、二人は何言ってんの、この人と言ったような顔で、僕の顔を見てきた。そんな変な事言ったかなあ。
「あの爺さんが話を聞いてくれるんだから、古い地図を頼りに探し物をするんじゃなくて、すぐに会いに行ってもいいんじゃないかな」
　爺さんにひと泡吹かせられないのは悔しいが、それが一番の解決方法だと思う。
「えー、せっかくここまで来たのに」
美優は、あからさまに不満そうだ。
「そうですよ、行きましょう、二人とも。せっかくなので、ハイキ

ングデスよ」
うーん、どうやら、僕が少数派のようだ。
まあ、ケイが言うように、ハイキングの気分で先に進んでも良いかもしれない……まあ、その行程は、ハイキングとは似ても似つかないようなヘビーな物かもしれないけど。

身構えていたものの、森の中はそれほど歩き辛くはなかった。まあ、歩き辛い事には変わりはないのだけど、人が歩いた跡なのか、道のように草が生えていない部分があり、その上は比較的歩きやすい。
とはいっても、男の僕とは違って、女の子二人はおっかなびっくり歩いていて、森に入る前に比べると、格段に進むペースは落ちている。少しでも歩きやすいよう、僕が歩いた場所に関しては、邪魔な木の葉や突き出した枝を払いながら進んでいるし、大分ペースも落としているけれど、それでも辛いようだ。
「二人とも、大丈夫？」
「だ、大丈夫デス」
僕の心配にそう言葉を返すケイだけど、顔には汗が浮かんで、疲れていそうだ。もちろん、美優だって同じだ。
「そうは言っても、結構長い間歩いたから、そろそろ休んだ方がいいよ」
「そうだよ、ケイさん」
「あの、その……ここで休むと、虫が……」
ああ、なるほどね……
「そこまで、虫が苦手なんだ」
「ええ、小さいころ家の中にお菓子を放り出して暫くしていたら、蟻がたくさんたくさんたくさん家に中に入ってきて……怖かったです」
ああ、それは怖いだろう。黒くて小さなのが床一面を覆い尽くして動いている様は、確かに怖い。想像したのか、美優も少し顔色を

悪くしていた。
「それに……その時、ですね……実は、腕にお菓子を持ったまま寝ていて……蟻がワタシの体に……」
這っていたわけね。それは怖い。
「いやー！」
具体的に場面を想像してしまったらしく、ついに美優が悲鳴を上げて、僕の後ろに隠れてしまった。うん、気持ちはわかる。それは怖い。
「仕方ない、少しは虫が出なそうな場所まで移動したら、休もう」
気が落ち着かない場所で休ませるのも流石に悪いし、僕たちは先を急ぐ事にした。
それから数十分、いい加減美優もケイも限界で、そろそろ我慢をしてもらって、ここいらで休憩を入れようと思っていたところ、辺りから水の流れる音が聞こえてきた。
「お兄ちゃん、水の音が聞こえるよ」
美優にも聞こえたようで、僕に確認をしてきた。
「ああ、そばに川があるのかな」
だったら、休むのにはちょうどいいかな。まあ、虫が居ないと言う保証はないだろうけど、辺り一面木と草に囲まれているよりは、精神衛生上いいだろう。
そんなことを考えながら数分進むと、ちょうど森が途切れた。目の前には、大小の岩が転がる川原と、静かに流れる川があった。
今まで頭上を覆っていた木の葉がなくなり、陽の光が直接僕たちに降り注ぐ。森の中を歩いていたのはわずかな時間だけれど、久しぶりに太陽を見た気がする。
「わあ、川だよ！　木とか森とか、そう言うのじゃなくて川だ！」
美優が感激の声を出して、川にそのまま突撃して行く。
「転ぶなよー」
僕の注意に、大丈夫だと元気良く返して、美優は一人、遊び始めた。
「はあ……やっと森が終わりましたね」

ホッとしたのか、ケイはその場にへたり込んでしまった。
彼女は彼女で、森の中を歩くのは結構ストレスだったようだ。
「お疲れ様」
「はい、お疲れ様です」
お互いの今までの苦労を労うと、僕たちも川の方へと向かった。
近づいて良く見ると、川は底が見えるほど澄んでいた。手をつけてみると、水の温度は思った以上に低くて、思わず声が出そうになった。
「わ、冷たい！」
僕と同じように手をつけたケイは、驚いてすぐに手を離してしまった。
僕は構わず、そのまま手に水をすくって顔を洗う。今まで歩いて来た間に、大分汗をかいていたようで、冷たい水で洗い流すと、何時も朝洗っている以上に綺麗になった気がする。
「ほら、ケイもやってみたら」
僕の言葉に促されて、ケイも同じように水をすくい、顔を洗う。
「はい、さっぱりしました」
最初は少し冷たそうにしていたけれど、すぐに落ちついた顔になって、僕と同じような事を言う。
「お兄ちゃん、ケイさん、一緒に遊ぼうよ！」
美優は相変わらず、水に入って遊んでいる。靴と靴下はしっかり脱いでいるけれど、長ズボンの裾は既に水に濡れていた。
「あんまり冷やすなよー」
「もう、心配し過ぎだよ、お兄ちゃん」
確かに、お前のその態度を見てると、心配なんて杞憂に思えてくるけども。急激に体を冷やすのは、あんまり良くないだろう。
「ほら、美優も喉が渇いただろ。一緒に休憩しよう」
リュックサックを下ろし、水筒を取り出しながら美優に呼びかける。
「あ、そうだね」
そう言うと、美優は靴下も履かずに靴をはき、慌てて僕たちの傍へ

とやってきた。
「はい」
美優が来たのを確認して、水筒をケイと美優に配る。
美優がさっそくふたを開け、中身を出すと、それは澄んだ茶色の麦茶だった。
「はあ……天国デス」
それに口をつけたケイの感想は、最高の賛辞だった。
「確かに、子の炎天下の下歩いた後、ゆっくりと飲む麦茶は美味しい」
麦茶に口をつけながら、僕もそう言った。なんとなく、ワインを味わうセレブ気分だ。飲んでいるのは麦茶だけど。
「デスよね！」
同意されたのが嬉しいのか、ケイは勢いよく返事をしてくれた。
それから数十分、のんびりと談笑をしながら僕たちは過ごした。
けれど、不意に周囲の茂みから、ガサゴソと騒がしい音が聞こえてきた。
「なんだろう」
三人そろって、音が聞こえてきた方を凝視する。
森の中は陽が当たらないので良く見えなかったけれど、何か大きな動物が通っているようだ。
「なんか、居るみたいだね」
「ウサギさんかな」
それはお前の好きな動物だろう。
「いや、もっと大きくて、強そうなのが居る」
四本足で移動してるから、猪か何かかな。
そう言えば、昔、岩三郎おじさんが、山で獲れた猪を使って牡丹鍋を食べた事があるとか言っていた気がする。
「大丈夫でしょうか」
ケイは不安そうにこちらを見つめていた。
「大丈夫だよ」

猪と直接出会ったら怖いけれど、見栄を張った。
「でも、暫く待ってから移動しようか」
僕の提案に二人は同意して、そのまましばらくその場で待った。
結局、猪もウサギも現れず、疲れをとった僕たちは、再び歩き始める事にした。
ここからどう進むか、改めて地図を確認したところ、この川は目的地のそばにも流れているみたいだ。多少遠回りになるみたいだけど、森を突っ切らなくても進めそうだ。
「地図を見る限り、まっすぐ森を突っ切った方が近いけど、川沿いを遠回りに進んでも、目的地に行けるみたいだね」
「あ、じゃあ川沿いにしましょう、そうしましょう、絶対そうしましょう！」
美優が口をはさむ暇なく、ケイの一言で僕たちの進行ルートは決定された。
川沿いの道は川沿いの道で、歩くのが難しかった。大小の岩が転がっており、油断をすると躓いてしまうし、水に入る訳にもいかない。
けれど、森の中を歩いている時よりストレスが少ないせいか、ケイは先ほどよりもペースを上げて進んでいた。美優もそれにつられるように、歩いている。どうやら、道選びは間違いではなかったらしい。
そのまま数十分進み、ついに僕たちは目的の場所へとたどり着いた。
目的の場所は、今までと同じ森の中。少し違うのは、大きな岩が目の前にあるくらいだ。
「ここが、目的地みたいだね」
地図を確認したけれど、間違いはない。
「ここに、何かあるのかな」
先ほどから美優が辺りを見渡しているが、めぼしい物は何もないようだ。あるとしたら、やっぱりこの目の前の岩なんだろうな。
「あからさまに、この岩が怪しいよな」

「うん、怪しい」
あからさまに、調べてくれと言うオーラがにじみ出ている気がするし。
「え、怪しいデスか？」
……まあ、気がするだけだから。
「とはいっても、地図を見る限りここが目標の場所だし、他に何もないみたいだから、これを調べてみようか」
と、言うかそれしかないし。
「そうですね、分かりました」
ケイも同意してくれたので、三人して岩の周りを調べてみる。
外周をゆっくり回ってみたけれど、やっぱり岩だ。あちこちにコケが生えて、年季が入っているけれど、ただの岩だ。ほんっとうにただの岩だ。
「何もないねー」
退屈したように美優が言う。岩を見ているだけなんてのは、活発な美優にと手は退屈この上ない事だろうから仕方ない。と言うか、僕も少し飽きてきたし。
「うーん、場所間違えたかな」
それか、地図自体が、まったく意味の無い物だったか。考えたくはないけれど、その可能性もありうる。となると、別の場所を探すか、それとも一度家に帰るか。
「うーん……」
ケイは、僕達がそんな事を考えている間も、しっかりと岩を調べていた。放り出して思慮にふけってしまった事を少し後悔する。余計な事を考えている暇があったら、彼女の力になろう。
気持ちを入れ直して、僕は再び岩を調べ始める。
　相変わらずただの岩だ。
「あ？」
　ふと、ケイが驚きの声を上げた。
「どうしたの？」

あわててケイに近づく。美優もすぐにこちらに走ってきてくれた。
「これデス！」
ケイが指差した先には、岩の合間に取っ手状の金属がついていた。
「周りも、なんか変だよ」
美優も驚き、指摘する。良く見ると、岩に誰かが付けたような、切れ込みが入っていたからだ。
「……怪しいなあ」
「怪しいね」
「怪しいデス」
今度は三人とも、怪しい事で意見が一致した。
「まるで扉みたいになってるけど、開けられるかな」
取っ手のような金属、そして一部に入った切れ込み。開けゴマと唱えたら、開きそうな組み合わせだ。
「開けゴマ！」
僕と同じような事を考えたのか、美優がさっそく魔法の呪文を唱えてくれた。けれど、岩には何の変化もなく、美優の声だけが辺りにこだまする。
「えへへ、間違えたかな」
恥ずかしさをごまかすように、美優が言った。
「とりあえず、引いてみるか」
まずは力押しで試してみよう。
僕は、金属部に手を当てると、力いっぱい前に引いた。
「くうーー！！」
引く、引く、ともかく力任せに前に引く！
「頑張ってください！　ユーキさん！」
「も、もちろん！」
ケイの応援もある、手加減は出来ない！　ともかく力を込めて引く！
が、まったく状況は変わらない。
「……ぜえ……無理だ」
まあ、力を込めたところで、どうしようもならないんだけどね。

「となると、押してみるか」
引いてダメなら、押してみろ、だな。
「無駄だと思うよ、お兄ちゃん」
妹が冷ややかな言葉を浴びせてくるが、気にしない。お前も、ケイみたいに素直に応援してくれよ……ちくしょう。
「やってみなけりゃ、分からないよ」
まあ、そんな妹は無視して、ともかく押してみる。
けれどもやっぱり結果は変わらない、僕の目の前に立ちはだかれる強敵は、びくともしなかった。
「はあ……駄目だあ」
クタクタになって、僕はその場にへたり込んだ。
「お、お疲れ様です」
ケイが励ましてくれる。ありがとう、それだけで報われる。
「ほら、無理だって言ったよ」
うん、分かってるよ。と言うか自分でも薄々そう思ってたよ。
「となると、どうしようか」
正直、単純に力の問題となると、手の施しようがない。
「えーと、扉を爆破してみるとか」
「我が妹ながら、物騒な事提案するなあ」
「危ないから、やめた方がいいですよ」
それ以上に、爆破と言う発想じたいが危ない。
「古文書の他にさ、何か手掛かりになるような物って無いの？」
ダメでもともと、ケイに聞いてみた。まあ、昨日の様子から考えると、アレしか手掛かりは――
「あ、あります」
「あるのかよ！」
思わずガクッと崩れてしまった。
「リュック、貸してください」
言われるままにリュックサックを渡すと、ケイは中身から少し古びた木箱を取り出した。こりゃまた、年季が入ってそうな一品だっ

た。
「それも、ケイのお父さんが持ち出したもの」
「はい、そうです！」
ケイは力強く首を縦に振る。
ケイ、そこはそんなに力強く肯定しなくていいから……ホントは持ち出しちゃダメな物なんだし。
そんな事お構いなしに、ケイは木箱のふたを外すと、中から古びた鍵が姿を現した。
「鍵……か」
「はい、鍵です」
扉に鍵、何か出来過ぎている気がしなくもないけど。
「あ、鍵穴みたいなのが、ついてるよ」
ちょうど、美優が鍵穴らしきものまで見つけてしまったようだ。本当に出来過ぎだ。けど、願ったり叶ったり、って奴だ。
僕たちはすぐさま美優の元へと駆けよると、その鍵穴のような物を確認した。
それは、岩の金属部分に空いていて、今すぐ鍵を入れてくださいと言わんばかりだった。
「入れてみますね」
ケイもそう感じたのか、すぐに鍵を鍵穴に入れた。鍵を回すと、何かが外れる音がした。「動かせる……かな」
恐る恐る金属部を手に持ち、少し押してみると、さっきまではビクともしなかった岩……その一部が、重い音を立てながら動き始めた。
「……やるよ」
二人に声をかけ、僕は意を決して、金属部分を押した。僕達が想像したように、切れ目の入っている部分が丁度押し戸のようになっており、少しずつ動く。
扉は重かったけれど、それ以上に僕は興奮していた。古文書と言われた時は、どうなるか分からなかったけれど、この先には間違いな

く何かがある、そう確信できる。
扉を開け切ると、中から土とコケが混ざったような臭いがしてきた。
中に生物の気配はしない。本当に、長い間放置されてきたのだろう。
「お兄ちゃん、この先は見える？」
扉の中を不安そうにみつめ、美優は言った。
「いや、見えない」
美優にも見えなかったようだけど、僕にも何も見えなかった。
「ユート、どうします？　入りますか？」
ケイも何も見えないようで、不安そうに僕に聞いてくる。
今のところ、扉の先には危険性を感じないけれど、中に何がある か分からない。となると、女の子二人を進ませるのは危険だろう……なら、まずは僕が入ってみて、安全を確かめるしかないか。
「僕が先に行くよ」
リュックから懐中電灯を取り出しつつ、二人に聞くと、同意してくれた。
「気をつけてくださいね」
「うん」
ケイの不安な声に、努めて明るく返しつつ、僕は懐中電灯片手に、扉の中へと足を進めた。

扉の中は、思ったより広かった。
正直、僕一人満足に入れない場所かと思っていたけれど、入口は広い空間になっていた。中には何もなく、岩の中に空っぽのドームがあるような形だった。
「何も……無いのかな」
懐中電灯で当たりを照らして確認してみる。そうすると、奥の方に何か大きな塊がある事に気がついた。
「なんだろう」

慎重に、慎重に近づく。
触ってみると、それ何かの金属のようだった。
「ん……ん」
その塊を触っている最中、不意にどこかから声が聞こえてきた。
思わず、後ろを振り返る。けれど、見えるのは入り口から入ってくる少しの明かりだけ。
気のせいなんだろうか、いや、きっと気のせいだろうな。気を取り直して、再び周りを調べよう。
「やれやれ……もう起きる時間でござるか」
そんな僕の気持を裏切る可能ように、さっきよりも大きく声が聞こえてきた。
「だだだ、誰！？」
声が震えてしまう、誰だ？　それに、何が起こっているんだ。
「んん、随分と若い声でござるな」
怯えている僕とは対照的に、声は随分と能天気だった。不思議なのは、その声は少しエコーがかかったような、電子音のような響きがしていた。
「おっと、暗がりでは分からんな、ちょっと待ってくだされ」
「え？」
その声とともに、目の前で大きな物が動く音がした。岩と金属がぶつかる音、そして、何か機械を動かすかのような声が響く。
「そうれっと！」
かけ後と共に、今まで以上に大きな岩と金属がぶるかる音が聞こえ、頭上で火花のような物が散った。細かい岩が、僕の頬に当たり、強い光が僕の目の前を覆った。
「うわ、まぶしい」
おもわず、目をつぶってしまう。
次に目を開けた時、天井は抜け、頭上からは太陽の明かりが降り注いでおり……その下には、巨大な人が立っていた……いや、巨大な人ではない、『巨大な人型のロボット』が、立っていた。

陽の光を浴びて、ロボットのボディーが輝く。
全身銀色のそのボディーは、どころどころ土汚れがあったが、美しかった。
「これで、見えるでござるか？」
呆然とする僕を気にせず、ロボットは悠々と答える。
「あ、はい」
まだ頭の中は混乱していたけれど、なんとか返事だけは出来た。
「ユート、どうしたんですか」
「お兄ちゃん、大丈夫？」
異変に気付き、入口で待っていた二人も僕の元へとやってきた。
「って、ええ！？　この人だれ！？」
そして、案の定仰天している。
「星の……巨人」
ケイさんは、呆然としながらそんな言葉をつぶやいた。
「ほう、その名はまだ残ってござったか……」
「はい……パパから、ずっと聞かされていました。かつて星空町には空から巨人が降り立ち、町の礎を作りましたと」
僕は、ケイの言葉を聞きながら、昔話の内容を思い出していた。
空から降りてきた星……それが、このロボットなのか。
古文書にあった、星の巨人の隠し場所……その場所に、まさか本物が眠っているなんて、予想もしなかった。
「その様子だと、星空町はまだ栄えているようでござるな」
少し安心したように、ロボットはそうつぶやいた。
「ふむ……そなたのその青い目は、主殿の物と瓜二つ。黒き長い髪は、姫様の元よりも美しいでござるな」
「あの、なんか今更だけど、僕、上凪悠斗と言います」
こう、お互いに名前も知らないまま呼び合うのも妙な気がしたので、ともかく名乗ってみた。
「これは失礼。拙者、ＡＴＦ－００……っと、これは余計でござった。町の者からはこう呼ばれてござった。『星丸』と」

「あ、星丸さんなんだね、私は上凪美優」
「ほう、悠斗殿と美優殿は、兄弟なのかな」
「うん、そうだよ」
「なるほど、兄弟そろって、利発そうでござるな」
ロボット……いや、星丸は、気さくに僕らに話しかけてくる。金属の顔は動かないけれど、細かいジェスチャーなんかをつけて、巧みに話をする。その姿は、まるで人間のようだった。
「そこで、青い眼をした娘さん、そなたも兄弟なのかな」
「あ、私は綺羅星ケイです。この二人とは、お友達です」
「そうでござったか。ケイ殿が、今の時代の綺羅星なのですな」
ケイの名前を聞き、一人しきりに納得する星丸。
「さて、拙者が呼び起こされたと言うことは、村はまだ健在という事でござるか。悪いが、案内してくれぬか？」
「村？　星空町の事？」
今は村ではないけれど、昔は村と呼ばれていたんだろうか。
「おう、星降りの集落の事でござるな、それでまちがいなはない」
「それじゃあ、行こうよ！」
最早長居する必要はない、そう言った感じで、美優はそそくさと外へ出ようとした。
「あいや、待たれよ」
だが、それを星丸が引きとめる。と言うか、腕を伸ばして美優を引っ張って来た。
「あ、え、どうしたの？」
突然巨大な手に掴まれた美優は驚き、声を上げる。
「せっかくなので、空から行くと言うのはどうでござろう」
そう言うと、空いた手で僕とケイをつかみ、引っ張り上げる。
「ちょ、何をするんだ」
「大丈夫でござるよ」
そう言うと、僕の体……いや、星丸は、宙に浮いた。
ジャンプした訳でもなく、ジェットを吹かせる訳もなく、徐々に

星丸の体は空へと昇って行き、あっっと言う間に山を超え、辺りを俯瞰できる高さにまで昇ってしまった。
下には来る時に通った森と山。少し離れた場所に、星空町が見えた。足元を見ると少し怖いけれど、まるで飛行機で空から大地を見ているようだった。
「うわあ……」
その光景に、美優が感嘆の声を上げる。ケイを見ると、無言で景色に見入っているようだった。僕も、突然の事態に驚きはしたものの、辺りの景色の雄大さに、言葉を失ってしまった。
「それで、星空町は、どこでござるか？」
暫く待ってから、星丸は僕達に尋ねた。どうやら、落ちつくまで待っていてくれたようだ。
「あ、あそこの、家がいっぱいあるところです」
僕は、星空町を指差す。それを確認すると、星丸はゆっくりと前進を始めた。
「うわっ！」
少し強い風が吹いた。風に僕たちの髪が揺れる、けれども、星丸は僕たちを逃げる手は緩めず、振り落とされる心配はなかった。
星丸に握られたまま、僕たちは星空町に降り立った。
降り立ったその直後、驚いた町の住民が集まってきて、僕たちを質問攻めにした事は、言うまでもないだろう。
ともかく、大人も子供も、沢山の人が集まって来た。
これは誰？　と言うか君は誰？　何をやったの？　危険はないの？
ともかく沢山の質問に、僕達と星丸は答えた。
星丸の正体が、星の巨人であると知った人々は、驚きを隠せなかったようだ。
「あれ、作り話じゃなかったんだ」
そんな風に漏らす人が何人もいた。まあ、僕も信じてなかったし、町の人も同じだったんだろうね。
「あいや、拙者、数百年の眠りから目覚めたばかりでござる、少し

休ませてくだされ」
　星丸からのギブアップの言葉で、流石に悪いと思ったのか、町の人々は質問をやめてくれた。とはいっても、顔を見ればだれもがまだ聞きたい事はある、と言った風で、その分僕たちに質問の量が増えた。
「ええい、何をやっている」
　そんな時、ケイの爺さんが僕たちのところへやって来た。それを見て、他の町の人たちは、少し離れる。
「これは……星の巨人か」
「は、はい」
爺さんも驚きは隠せないようで、星の巨人を見ながら僕に聞いてきた。
「これをどこで見つけた」
「森の中です」
「さっき、孫と一緒に居たのはそのためか」
「そうです」
　僕は、緊張しながら爺さんの質問に答える。変な事を言ったら、何を言われるか分からない。
「……孫と一緒に、山を歩いたのだな」
「はい」
「なんだと！？」
　僕の答えに、突如爺さんは怒り、声を荒げた。
「貴様、若い娘に危ないマネをさせるとは、どう言った事だ！　怪我をしたらどうなると思っている、ワシの孫だぞ、ワシの孫を怪我させるのじゃぞ」
　どうにも、ケイに無理をさせた事を怒っているようだ……って、無理をさせたから、怒っている？　それに、さっきから孫って。
「やめてください、ワタシがお願いしたんデス」
「むう……おい、小娘、なぜ無理をした。先ほど小僧にも言ったが、貴様が怪我をしたら、どうなるか……」

「あ、そっか、ケイの事、心配してたんだ」
やっと事情が繋がった。爺さん、孫であるケイが怪我したら心配だから、僕に怒っていたんだ。それに、森に入る前にやたらと監視していたのも、怪我しないように目をかけていた……と言うか、話すタイミングをうかがってたんじゃなかろうか。
「な、何を言いだす！」
僕の指摘が図星だったのか、爺さんは顔を真っ赤にして慌てている。
「本当ですか？」
それに追い打ちをかけるかのように、ケイが爺さんに問いかける。
「な、ななななな！　それは、まあ、心配したのは事実じゃが……」
もはや完全にしどろもどろとなり、渋々と心配していた事を認める爺さん。
なんだ、冷たく当たっていたのって、結局どう接していいか分からなかったんじゃないか。人騒がせな爺さんだな。
「か、帰る！　こ、小娘の事は、まだ認めた訳じゃないぞ！」
そんな情けない捨て台詞を残して、爺さんはさっさと逃げ出してしまった。
後に残されたのは、呆然とする僕たちと町の人たちだけ。
「まったく、なんでござったか？」
一人、事情が呑み込めない星丸は、僕に不思議そうに僕に聞いて来た。
「ま、親の世代で色々あっても、孫は可愛いってことだよ」
半分は、僕の願望だけれど、そう言う事だと思いたい。
「うーむ、よくわからんでござるな」
僕の自己完結した説明では当然理解できなかったのか、星丸は首をかしげて考え込んでしまった。さて、どこから説明するべきだろうか。
「ねえ、それより詳しく説明してくれよ！」

「このロボット、本当に星の巨人なの？」
「そもそも、あの爺さんと仲が悪かったんじゃないのか」
「それより、君たちの名前って？」
説明しようかと思ったけれど、それを遮るように町の人たちの質問が殺到した。
やれやれ、この調子じゃ、暫くは解放されそうにないなあ。

町の人たちに質問に答えているうちに陽は傾いていた。
興奮していた町の住民も、一人、また一人と家へと戻り、気がつけば僕と美優、ケイ、そして星丸を残して誰も残っていない。
「はあ……疲れた」
最後の一人が帰路に着いた事を確認して、僕はその場に腰を下ろした。見れば美優とケイも疲れた顔をして僕を見下ろしていた。
「ふあー、もう、早く帰ってご飯が食べたいよ」
美優が言うと同時に、僕と美優の腹の虫がなる。もうそろそろ夕食にするのに、丁度いい時間だろう。
「お腹空いたね」
「うん」
そんな呑気な会話をしていると、僕たちの方にケイが近づいていた。僕達がそろって彼女に振りかえると、彼女は立ち止り、僕たちの顔を見据えると、静かに口を開いた。
「二人とも、今日はありがとうございました」
口から出た言葉は、僕たちへの感謝の言葉だった。
「別にいいって。あらためてお礼を言われるのも、照れくさいし」
少し、顔が熱い気がする。
「お兄ちゃん、顔、少し赤い？」
妹よ、それは分かっててても黙っていてくれ。
「夕焼けだからだろ」
照れ隠しにそんな言葉を吐いて、僕は立ちあがる。
見上げた空は茜色に染まっている。青々と茂っていた森も、遠く

に見える山々も、すべて夕焼け色に染まっていた。家の窓にも明かりがつき、夕飯の臭いがただよってくる。
蝉の鳴き声も小さくなり、かわりに草の間から虫の音が聞こえてくる。
帰る通る車も人もない、静かな光景だった。
「ユート」
気がついたら、ケイが隣に立っていた。
「昼間、ユートが言ったとおりでした。この町の皆さん、みんないい人デス！」
「でしょ？」
僕達が星丸について質問されている時、ケイはまた別の事を質問されていた。
それは、自分自身について。
町の人たちは、ケイが爺さんに嫌われている事から、冷たく接触をしていた。町の有力者から睨まれている人物なんて、あまり触りたくないのが本音だろう。
けれど、それは杞憂だった。あの爺さんが、集まった町の人の前で、自分が孫娘の事を心配している事を暴露してしまったからだ。
ケイに冷たくする理由もなくなった町の人たちは、改めて彼女をこの町に歓迎した。
今まで冷たくしてしまった事を謝り、それをケイは当然のように笑って返す。
そうなれば、彼女と町の人たちの間に、良好な関係が築かれるのも、そう時間がかかるものではなかった。
「さて、帰ろうか」
何時までもここに居ても仕方がない、僕は首を長くして待っているであろう、岩三郎おじさんの元へと戻るため、二人に声をかける。
「うん」
「はい！」
あんまり遅くなるわけにはいかない。僕たち三人は、家への帰路

につこうとした……が。
「その、申し訳ないでござるが」
後ろから、それを引きとめる声が聞こえて来た。
「あ……」
そうだ、一つデッカイ忘れ物があった。
「拙者、どうすればいいでござるかな」
星丸が、自分がどうすればいいか分からず、呆然とそこに立ち尽くしていた。

「がっはっは、ロボット？　大丈夫、家においても大丈夫だぞ」
星丸を家に置いていいか。そう質問したら、岩三郎おじさんは二つ返事でＯＫを出してくれた。
「やったー！」
「やりましたね！」
後ろで美優とケイが手を合わせて大喜びし、月夜おばさんが少しあきれ顔をしてこちらを見ている。ちなみに、話題の星丸は、家の庭に居る。さすがに屋根の下には入らなかった。
「んじゃ、星丸に伝えてくるよ」
答えが来るのを今か今かと待ってるだろうし、早く伝えないといけない。さっさと玄関を出ると、靴を履いて庭に出る。庭には、居心地が悪そうに膝をかかえてうずくまっているロボットが居た。
「……何してんの？」
「いやあ、邪魔にならない様に、少しでも縮こまろうと思って」
どことなく情けなさが溢れ出るポーズのまま、質問の答えが返って来た。
「ほら、おじさん達からもここに居ていいって言われたからさ、楽にしなよ」
このまま奇妙なオブジェで居られてもすごい困るし。
「おお、それはありがたい」
そう言うと、星丸は音も立てずに静かに立ち上がる。改めて思う

けれど、こいつが動く時、すごい静かだ。学校の社会科見学で自動車工場に作業用ロボットを見た事はあるけれど、あれでも動く時は結構な稼働音がするというのに、星丸は静かなものだ。思えば、空を飛んで時も、ほぼ無音だった。

まあ、体の大きさが大きさなので、歩けば足音が響くし、土煙が上がるのだけど。

改めて、星丸について考えてみる。

この町に伝わる昔話を鵜呑みにするならば、数百年前にこの町に、空から降って来たロボットだ。

それがどういう訳か、山奥に眠っていた。それも、数百年たっても問題なく稼働する状態で。

「ほんと、僕の知っている科学技術とは、レベルが違うんだな」

「ふむ、数百年たったと言え、まだ我が母性の技術には追い付いていないのでござるな」

感慨深げに星丸は言う。

「少し悔しいけど、まだ地球の技術じゃ、星丸は作れそうにないしね」

「そうでござるか」

星丸の体を改めて見上げる。

既に辺りは暗くなっているのでよくわからないが、見た限りそのボディーには、錆び一つない。さすがに土埃がついているけど、その白銀のボディーの状態は、非常に良い。

材質からして、地球の物ではないんだろう。

そんなロボットが、目の前にある。

「星丸は……この空の向こうから来たんだよな」

僕は空を見上げる。

空には数えきれないほどの星が瞬いていた。都会で見上げる空は、数えるほどしか星がないけれど、星空町で見上げた夜空には、こぼれおちそうなほどの星があった。

それを見ていると、昔の人が星丸の事を落ちてきた星だと思った

事も、分かる気がした。
「そうでござるな」
星丸も、同じように星空を眺めていた。
その表情は読み取れないけれど、声には若干の寂しさが混ざっていたような気がする。
ロボットの声に、感情を感じると言うのも、妙な話かもしれない。けれど、こいつの声は、人間のそれと同じように感じられる。
「君の星、科学技術はすごい発達してたんだろうね」
星丸を見ていれば、嫌でもわかる。
「そうでござろうな」
だが、と星丸は付け加える。
「このような満点の星空は、ついぞ見る事が出来なかった」
「へえ……」
そう言われると、この星に住む人間として、少し誇らしくなる。
「拙者が眠りにつく前も、同じように主殿と姫様と共に、夜空を見上げたものだ」
「主と姫……か」
主と言うのは、昔話の中で出てきた、鎧の中から出てきた人の事だろう。
「初めはこの星の言葉を知らず、意志の疎通も出来なかった二人でござったが、気がつけばお互いを好きになっていた。故郷を失った姫様、そしてこの星へと流れ着き、すべてを失った主殿。失った二人、何か感じ入るものがあったのだろう」
昔を思い出すように、星丸は語った。
「拙者は、その二人を見守る事ができ、幸せだった」
やはり、その言葉には、寂しさが感じ取れた。
無理もないか、ロボットである星丸はともかく、主も姫も生きてはいない。思い出話と言えば聞こえはいいけれど、それが既に居なくなった人の事であれば、語る心は複雑だろう。
「星丸はさ、どうしてこの星に？」

このまま続けさせるのは、少し悪いかと思って、別の話題を振ってみる。
「そういえば、伝えていなかったでござるな。しかし、この星に来た理由でござるか」
僕の質問に、星丸は少し答え辛そうだった。
「あ、無理に言わなくても良いから」
ひょっとして、とても口に出せないような理由なんじゃなかろうか。だとしたら、無理やり聞くのも、悪い。
「あいや、そんな深刻な顔をしないでも大丈夫でござる。ただ、まあ……情けない理由でござってな」
「あ、別にヤバイ理由ではないのね」
てっきり、母星がなくなったとか、深刻な理由を考えていたけれど。
「まあ、何と言った事か。我が主殿……拙者を作り上げた人物は、変わり者でござってな。拙者をほぼ一人で作り上げるほどの技術と知識がありながら、それをろくでもない事ばかりにつかっていて、どこの国にも協力せず、好き勝手をしていたのでござる」
「へえ、そう言う人って他の星にも居るんだ」
日本にも、そう言う人は居るだろうし。
「けれど、技術だけは確かだった。それで、とある国に強引に協力されそうになった時、拙者に乗って星から逃げ出したのでござるよ」
「言うほど、しょうもない理由じゃないじゃん」
「そうでござるか？」
「国家レベルでシャレにならない悪戯して、それで逃げ出したかと思った」
「いや、そんな事は気にする人ではなかったでござる」
気にしないんだ……と言うか、その口ぶりだと、過去に何かしろやってそうだけど、大丈夫なんだろうか。
「お兄ちゃん、そろそろ晩御飯だってー」
丁度話が終わったころ、家の中から美優の呼び声が聞こえてきた。

「悠斗殿、そろそろ行った方が良いですぞ」
「うん、そうする」
星丸の方も食事に行くよう促しているし、大人しく家に上がる事にする。
「さて、拙者も一休みするでござるかね」
そう言うと、星丸は地面に横になる。倒れる時に土埃が少し舞、僕の顔にかかる。
「おっと、失礼」
「別にいいよ」
どうせ、このあとすぐに風呂に入るしね。

翌日、ケイは実家に戻ると言いだした。僕たちは少し驚いたけれど、誰も止めはしなかった。まあ、昨日の態度を見れば、そこまで酷い事はされないだろう。
それでも心配だからと、美優だけはケイと一緒に出ていく事となった。僕も行くべきか迷ったけれど、あまり大人数で押し掛けると言うのも失礼だろうと思い、当初の予定通り、夏祭りの準備に参加することとなった。
まあ、参加したはいいものの……
「星丸、ここにそいつを置いてくれ」
「了解でござる」
数百キロはあるであろう荷物を持って、星丸はこちらへ歩いてくる。大人数人がかりで運ぶような荷物を、一人で、文句も言わずに運んで来てくれている。
やることもない。そう言って、星丸は僕たちの手伝いを申し出てくれた。断る理由もないので、快く僕たちはＯＫを出して、今に至る。数十人分の戦力が、今日になって一気に加入した訳だ。
細かい作業なんかはできないけれど、力仕事に関しては、ほぼ星丸に一任してしまっている、少し悪いけれど、それの方が圧倒的に早い。すこぶる早い。おかげで、大幅にペースが上がって、昼頃に

はほぼ仕事がなくなってしまった。
「さて、そろそろ昼食かのう」
昨日に比べると少し早かったけれど、準備の責任者がそう呼びかけた。それも仕方ない、出来る仕事が残っていないのだから。
祭りの準備に集まっていた一同は、広場の隅に集まると、それぞれが持ち寄った弁当を出す。
ちなみに、僕は月夜おばさんが作ってくれたものだ。岩三郎おじさんが太鼓判を押してくれていたが、実際すごい美味しい。
「はっはっは、星丸さんのおかげで、準備がはかどりますわい」
「なあに、これくらい、お安いご用でござる」
星丸もしっかり僕達に混ざっており、会話に参加している。
まあ、図体が大きいので、ロボットの周りに集まる人間と言う、大分歪な光景にはなっているのだけれど。
「そういえばさ」
ふと、星丸を見ていて気になった。
「僕たちはご飯を食べれてエネルギーをとるけど、星丸はどうしてるの？」
昨日から動きっぱなしだけど、止まるような気配がない。
「お、そういえばそうだな」
「ガソリンとかだったら、給油しないと不味いぜ！」
僕の質問に対して、周りが少しざわつく。
「拙者、米と水さえあれば動くでござるよ」
「「「嘘をつくな」」」
その場に居た人間から、いっせいにツッコミが入る。そんな物があってたまるか。と言うか、ベジタリアンだってもう少しマトモな物を食うわ。
「ふむう、なぜ嘘だと分かったでござるか」
「ああもう……そもそも、星丸の星に米ってあったの？」
「なるほど、それで分かったでござるか」
「いや、問題はもっと別の場所にあるよ！」

このロボット、超技術の固まりだと言うのに、どこか抜けている。
いや、その抜けている事すらも、超技術の一つなのだろう。なにせ、『人間らしい』のだから。
「ほんと、ロボットとは思えない」
「それは、褒め言葉ととっていいでござるね」
「まあね」
身体こそ鋼でできているけれど、星丸と話していると、こいつが人間であると錯覚してしまう事がある。星丸を作った主と言う奴は、紛う事無き天才なのだろう。
「でもさ、本当に燃料って何なの？　分からないと、突然止まった時にどうしようもないだろう？」
冗談抜きで、星丸は超技術の固まりだ。ちゃんと勉強した人が見たら違うのかもしれないけれど、僕を含め、この町に住んでいる人間では、その中身がどうなっているかなんて見当もつかない。
それだけに、壊れた時にどうやって修理していいか、見当すらつかない。
いや、修理だけじゃない、燃料切れで止まった時だって、どうしていいか分からない。
「拙者、皆の愛と勇気で動いているでござるよ」
「夢はあるけど、それはねえよ！」
星丸はそう、冗談で返すけれど、僕は心配だ。星丸に何かあった時、何もできないのは嫌だ。
せめて、何か聞きだしておきたいけれど、星丸はこうやってはぐらかしてばかりで、僕の質問には答えてくれなかった。
「はあ、まあいいや」
このまま聞いても、らちがあかない。
星丸も、本当に進退きわまった時には何かしろ僕達に手段を示してくれるはずだ。こっちの勝手な希望ではあるけど、そうであると思いたい。
「時には、諦める事も肝心でござるよ」

「はいはい」
気の無い返事を返すと、僕は再び弁当に手をつける。
「そういえば、午後はどうするでござるか」
「ん、そういえば、今日はやる事が残ってねえな」
思い出したように、まとめ役の爺さんが言った。そういえば、星丸の奮闘のおかげで、もうやる事は残っていない筈だ。
「まあ、飯食い終わったら、解散だな」
当然のように、爺さんは答える。
「そうだな、丁度雲も出て来ているしな」
別の人が空を見上げて言った。つられて、僕も空を見上げたが、確かに大きな入道雲が、僕たちの頭上に広がっていた。気がつけば、太陽も雲に隠れている。
「なんか、振り出しそうだね」
僕がそうつぶやいた時、丁度ポツリと僕の頭の上に雨粒が落ちた。
「あ」
「にわか雨だな」
空から落ちてくる雨粒は瞬く間に増え、勢いを増す。僕たちは慌てて荷物を纏め、すぐそばの建物の屋根の下に避難する。
「おーい、みんな大丈夫か」
「大丈夫っす」
ビショビショになってしまったけれど、僕も荷物も、無事に無事な場所に避難できた。
「あ……」
けれど、大きすぎて逃れる事が出来ない星丸は、雨の中、静かにたたずんでいた。
「おーい、ロボットの旦那、大丈夫かい」
心配をしたのか、一人のおじさんが星丸に声をかける。
「大丈夫でござる」
星丸は、何でもないと言った風に返事を返す。まあ、ロボットだから気にしなくてもいいのかもしれない。

それでも、雨の中一人で立っているのは、寂しそうだった。
「……」
星丸の顔を見る。金属で出来た顔は表情を動かさないけれど、どこか寂しそうに見える。
思えば、昨日の夜昔話をしていた時も、同じだったのかもしれない。
数百年、確かに星丸の主はこの町に居た。
けれど、時間がたち、星丸は一人残った。老いもせず、ただ一人変わらずに。
それは、時間の流れから一人だけ取り残されてしまう事ではないだろう。
雨の中、一人で外に立つ星丸。
雨の中、まとまって軒下に避難する僕達。
その光景が、星丸の立場が孤独である事を、端的に表しているような気がした。
「よっと」
そう考えていたら、自然と足が前に出た。
「おい、雨に濡れたら風邪ひくぞ」
「大丈夫だよ、多少濡れたって」
雨は思ったよりも激しくて、全身あっという間に濡れてしまったけれど、気にせず星丸の傍まで駆けよる。
「よっ」
星丸のボディーを軽く叩いて僕が来た事を知らせる。
「悠斗殿、濡れては体に毒ですぞ。屋根の下に戻りなされ」
「こんなの、すぐ乾くって」
心配してる所申し訳ないけれど、星丸の忠告を無視して、僕はその場にとどまる。
「雨に濡れるなら、一人より二人の方がいいでしょ」
我ながら、意味不明な理屈だとは思う。
「は？」

当然のように、星丸は困惑の表情を浮かべる。いや、顔は動いていない、けど、そんな気がしたんだ。
「例えばだけど、雨の日に友達と一緒に帰るとき、一人だけ傘が足りなくて雨に濡れていた奴が居たとする。自分は傘があるから濡れていないけれど、何となく気分は良くないと思う。多分、それと同じような感じだと思う。」
「ふ……そうでござるか」
滅茶苦茶な説明だけど、星丸は納得してくれたみたいだ。
「ねえ、星丸さ」
「なんでござるか」
「なんで、あの岩の中で眠っていたの？」
それも数百年。下手したら、古文書が失われて、誰も起してくれなかった可能性すらある。
そんなリスクを冒してまで、なぜ星丸を封印めたのか。なぜ、星丸はそれを受け入れたのか。
「どうして、でござろうな」
「は？」
今度は、僕が困惑の表情浮かべた。
「いや、理由はちゃんとあるでござる。けれど、拙者は納得していないので、上手く説明が出来ないのだ」
「自分でも納得していない……か」
それは、無理やり封印されたと言う事だろうか。
「主殿の命令に従った……いや、違うな」
星丸の声には、明らかな迷いが混ざっていた。どこまでも人間臭いロボトだと思う、彼は悩んでいるのだろう、なぜ自分が封印されたか、それを受け入れているのか。
「案外、長い間眠っててて忘れたのかもね」
「はは、そうかもしれぬな」
僕の冗談に答えて笑い、星丸は言葉を続けた。
「忘れたのなら、思い出せばいい。迷っているのならば、答えを出

すまで思考しよう。幸い、拙者にはまだまだ時間がある」
誰に聞かせるでもなく、星丸はつぶやいた。
僕達が話している間も、雨は降り続ける。激しいけれど、その雨は不快ではなかった。
蝉の鳴き声も消え、辺りには雨音だけが響く。
星丸が主と過ごした時から、長い時間が経ったけれど、これだけは変わっていないと思いたい。
夜空を見上げた時と同じように、星丸と主、姫の三人は、雨の中で語り合う事があったのだろう。変わり者と言われた星丸の主は、案外、姫に下らない冗談を言って困らせたのかもしれない。姫は、文句を言いつつもそれにつきあったのかもしれない。それを見守る星丸が、居たのだろう。
遥か昔の出来事を知るすべを、僕は持っていないけれど、その時間は星丸にとって尊い時間だっただろう。

雨が上がり、そろそろ皆が帰ろうとした頃、広場に三人の来訪者が現れた。
「お兄ちゃーーん！」
一人は、元気に声を上げながら走ってくる、美優。
「わ、ずぶ濡れデスね」
雨でぬれ鼠の僕を心配する、ケイ。
「げ、爺さん！？」
「ワシを見るなり妙な顔をするな」
そして、三人目はケイの爺さん。
「って、あれ、ケイと一緒に居るってことは」
「勘違いするなよ、昨日世話になったと言うから、貴様の所まで例に来てやったと言うのだ」
あら、まだそういう態度なのね。
「べ、別に大事でもないが、孫は孫なので、礼は言っておく。ワシと孫の関係を改善させたいと尽力した事に関しては、別にありがた

く思って居ないからな！」
何と言うか、話せば話すほどボロが出る人だ、孫がお世話になりました、仲直りするために頑張ってくれて、本当にありがとう、と言う事でいいんだろうか。表情こそ動かないが、首は真っ赤になっているし、よっぽど恥ずかしいんだろうか。
「光太郎……素直に認めればいいんじゃが」
後ろでため息をつきながら、岩三郎おじさんがつぶやいた。
「何を、ワシが素直になっていないだと！」
それを聞いた爺さんはすぐさまに岩三郎おじさんにかみつく。
「うん、貴様は昔からそうあろう。思えば高校の時も、若い娘にキャーキャー言われておったのに、片っ端から興味がないと言って、振りおって」
「ふん、それがどうした。よってくる虫には興味はないわい！」
「はん、そのくせ振った後に、振るんじゃなかった、とか、なぜ素直になれないんだとワシに泣きついて来たくせに！」
「う、うるさい。女とまったく縁のなかった貴様に言われたくないわ！　この筋肉ダルマ！」
「ガリ勉モヤシが！」
そのまま爺さん二人は口喧嘩を始めてしまう。そのままヒートアップして拳と拳で語り合いそうな空気だったが、他の町の人たちは、さして気にする風もなく。
「はあ、また始まったよ」
そう、呆れた顔をしてつぶやいて、いそいそと帰り支度を進めている。
「あの、止めなくて良いんでしょうか」
ケイは不安そうにそう言ったが、心配なさそうである。町の人の様子を見る限り、いつもの事なんだろう。
「大丈夫だよ、これもボケ防止の運動なんだよ！」
「誰がボケだ！」
「誰がボケじゃ！」

美優の失礼な発言に、二人して即座に叫び返す。なんだ、やっぱり仲がいいじゃないか。
「で、実際のところ、仲直りはできたの？」
もう、あの爺さん二人は放っておく事にして、僕は美優とケイに状況を尋ねる事にした。
「あ、はい……たぶん、大丈夫です」
前ほど深刻そうではないけれど、まだ言葉に陰りが見えた。
「あのおじさん、まだケイさん事、名前で呼ばないんだよ」
「ああ、なるほどね」
まあ、ある程度話は出来る状態にはなっているんだろう。それだけでも大きな進歩だし、前に比べれば全然良い状態なんだろうけど、あと一歩が足りないと言ったところだろうか。
「ま、万事丸くはいかない、と」
「ふうむ、ところで、ケイ殿はあの方と何かあったのかな」
まだ事情を飲み込めていない星丸は、光太郎の爺さんを指差しながら言う。
「はい、グランパなのですが、昔パパと喧嘩をしてしまって、それ以来、仲が悪いのデス」
「そうでござるか、いつの時代も、そのような喧嘩はあるのでござるな」
しみじみと、星丸は言った。

「ぜえ……ぜえ……」
「はあ……はあ……」
それから数十分、もはや万事は尽くしたと言った面持ちで、岩三郎おじさんと光太郎の爺さんは争いを終わらせた。二人とも、人仕事を終えたように満足そうな顔であった。全然尊敬は出来ないけれど。
「ゆ、悠斗と言ったな」
「あ、はい」

突然話を振られ、驚きながら答える。
「ま、孫が世話になった……」
そう言うと、爺さんは改めて僕に礼を言った。
「いえ、むしろ無茶させてしまって、すいませんでした」
「なあに、女も強くなくちゃ、やっていけないわい」
僕の謝罪に対して、即座に岩三郎おじさんが口をはさむ。
「これだから脳味噌まで筋肉の男は……」
「なんじゃと」
「あーもう、話が進まないからストップだよ！」
再び戦いを始めそうになる二人に美優が割って入ると、流石に悪いと思ったのか、二人とも臨戦態勢を解く。
「ところで、だ」
「はい？」
咳払いをすると、光太郎の爺さんは話を切り出した。
「ケイから古文書は受け取った。愚息が後始末を娘に押し付けたのは許し難いが、こうやって家宝が戻って来たのは喜ばしい」
ああ、あの古文書、ちゃんと返せたのか。
正直、僕にとっては古ぼけた紙以外、何物でもないのだけど、やっぱりこの町にとっては大切なものなのだろう。
……ケイのお父さん、そりゃ恨まれる訳だ。
「それだけではなく、まさか星の巨人まで探り当ててしまうとは……他所者に見つけられてしまったのは、遺憾ではあるがな」
「ふん、ケイの穣ちゃんにも、綺羅星の血は流れているだろうが！」
何時まで拘っている、そう言いたげに、岩三郎おじさんは睨み、口を開いた。
「ふん！」
この人も意地があるのだろうか、未だに態度を変えない。
「はあ……」
思わず、ため息が出てしまった。
「まあ、それはいい。星の巨人を見つけた事、確かに感謝している」

「あ、どもっす」
てっきり、勝手に掘り起こした事を叱責されると思っていたけれど、そんな事はなくてよかった。
「えっと、何はともかく、古文書は返せたって事は、ケイがこの町に来た目的は、果たせたのかな」
確か、星空町に来た理由は、古文書を返すことが理由だったし。
「あ、はい……そうです」
「なんだか、煮え切らないね」
ケイの返事は、まだどことなく歯切れが悪かった。
「ええと、何かを忘れているような」
そう言うと、ケイは一人、考え込んでしまった。
「……目的は、果たしたか。なら――」
僕の言葉を聞いて、爺さんは何かを言おうとしていた。
「すぐに帰れ、なんて言わないよね」
「……」
僕の質問に対して、爺さんは何も言わなかった。口を挟まなかったら、たぶんケイに帰れと言っていたんだろう。
「まったく……」
岩三郎おじさんも理解したのか、呆れていた。
「……綺羅星の翁殿」
今まで沈黙をしていた星丸は、静かに爺さんに向けて話し始めた。
「孫は、大切にするでござるよ」
「わかっとるわい！」
「お主は生きている。孫もまだ生きている、されど、どちらかが失われる事は、明日にでも起こるかも知れぬでござる」
星丸の言葉は静かだが、そこには悲しみが混ざっているように思えた。
「ぬう……」
「これでも数百年前から生きている身でござる。年寄りの要らぬお節介でござるよ」

そう言うと、星丸は空を見上げた。
多分、もう居ない主と姫の事を思い出しているのだろう。
「あ！」
重くなってしまった空気の中、考え込んでいたケイは、突然叫んだ。
「鍵、鍵でデス！」
「鍵って言うと、星丸が封印されたいた岩の？」
そこで僕も思い出した。そういえば、開けた後、あの鍵って回収していない。
「ど、どうしましょう、取りに行かないと不味いデス！」
うん、古文書を返したのなら、鍵も返さないと不味いだろう。
「お兄ちゃん、もう一度行こうか」
やるく満々、と言った面持ちで、美優は言う。
「そうだな、今度は僕一人で行ってくるよ」
まだ陽は高い。今から行っても、晩御飯までには帰って来れるだろう。
「いや、ワシが行こう」
僕を遮るように光太郎の爺さんが前に出ると、そう言ってきた。
「は、正気ですか？　僕達ですら結構きつかったんですよ」
「そうだよ、やめようよ！」
当然のように、僕と美優は反対する。老人に、あの道は危険だと思う、歩いた僕達がそう思うのだから、間違いはない。
「なあに、都会の者には、まだまだ負けんよ」
腕をまくりあげながら光太郎の爺さんは言う。
確かに、森を歩くという点に関しては、僕たちよりも詳しそうだけど、歳が歳だ、途中で体力が尽きるのではないか、心配で仕方がない。
「それになあ、孫娘の友人に、何度も世話をかける訳にはいかない」
「いや、友人だからこそ頼ってくださいよ！」
「そうデスよ！」

遠慮しないでいいじゃないか、ケイだってそう言っているし。
「悠斗、ここは大人しく、甘えさせてもらえ」
そんな僕達に、岩三郎おじさんは意外な言葉を投げかける。
「え、どうして？」
疑問だった。正直、岩三郎おじさんは、自分から行くとか言い出しかねない人なので、僕たちを止めたのが、意外だった。
「孫娘に、何かしてやりたいんだよ」
静かに、諭すように、岩三郎おじさんは僕達に言う。
それを聞いて、僕たちは黙った。
「べ、別にそんなつもりはない！」
そう言いながら、相変わらず光太郎爺さんの首は真っ赤だった。
「そ、それじゃあ、お願いします、グランパ」
「おう、任せておけ！」
ケイから了解の言葉を受け取ると、光太郎の爺さんは意気揚々と歩きだした。
その背中は、頼もしく見えた。
何だかんだで、孫娘の力になれるのが、嬉しくて仕方ないだろう。
その姿を見て、僕たちは安心した。
「な、言っただろう」
そんな僕達に、岩三郎おじさんはほほ笑みながら話しかける。
「さて、それじゃあ僕たちはどうしようか」
何時までも呆けている訳にはいかないので、気分を変えよう。

「いやあ、心まで洗われるようでござる」
星丸が感激の声を出す。
「そっか、やっぱり気持ちいいもんなんだね」
僕はデッキブラシを星丸の身体にこすりつけつつ、答える。
あれから、僕たちは岩三郎おじさんの家に戻って来た。
目的は、星丸を洗うためだ。
美優が『せっかくだから、星丸を洗ってあげようよ』と言いだし、

それに星丸が乗った形で、こうなった。まあ、何百年の岩の中に居て、結構汚れていたから、一度洗う必要はあっただろう。今日の雨で多少流されたとはいえ、汚れが結構目立っていたしね。
それに、なにより、星丸自身が洗われる事を喜んでいるので、よしとしよう。
「はあ、ピッカピカデス」
スポンジ片手に、ケイがうっとりとしたようにつぶやく。確かにケイが洗った場所は、綺麗に輝いていて、のぞきこめば自分の顔が見えてしまうそうだ。
「そりゃー、水だ―！」
美優は、ホースを持って星丸の全身に水をかけている。
「はは、言いでござる、美優殿。もっとやってくだされ！」
星丸も、それが気持ちいいようだ。
「ま、人間みたいに風呂に入るわけにはいかないしね」
つぶやきながら、僕は考える。
星丸のサイズは、大体僕の三倍くらい。多分、五メートルから六メートルの間だろう。横幅もそれ相応に広い、人間でいえば、結構鍛えこんでいる人間ほどの肩幅がある。それがすっぽり入るとなると、銭湯の風呂でも難しい。
「風呂でござるか……主殿が入っていて、羨ましかったでござるよ」
「やっぱり、そのサイズじゃ入れる風呂釜がなかったんだね」
うん、それはちょっと残念かもしれない。
「お風呂に入れなんだ……星丸、かわいそう！」
そんな境遇に同情してしまったか、美優は少し涙ぐみながら、力いっぱいホースを振り回す。せめて、水浴びだけでも楽しんでほしいと張り切ってるんだろう……だけど、水が僕とケイにも思いっきりかかっていた。
「きゃ！」
驚いたのか、ケイが声を上げる。既に上着はぐっしょり濡れていて、その……下着が少し透けている。

「美優、少し水弱めて！」
「えー、なんで？」
「えーと、それは、あの」
面と向かって、透けてますよとは言い辛い。
「悠斗殿、目がスケベでござるよ」
「あー、なんだろう、そうなのかなーあはははは」
くっ、なぜ気がついたんだ、星丸。
「スケベ、ですか？」
「あー、ケイさん、透けてる、透けてるよ！」
「大ジョーブデスよ、これくらい」
あ、ケイ的には大丈夫なんだ、よかった。
「悠斗殿、今少しホッとしたでござるな」
相変わらず、星丸は僕の変化に鋭い。
「お兄ちゃん、あんまりジロジロ見たらだめだからね」
「はい、分かっております」
どうやら、分かっていたのは星丸だけじゃなく、妹も同じようだ。
大人しく、忠告には従っておく事にする。それでも少し悔しいので、星丸を洗うブラシに込める力を少し強めにした。
「あ、いいでござる」
……逆に気持ちいいみたいだ。まあいいか。
「しかしまあ、洗うと本当に綺麗になるね」
改めて、そう思う。
星丸のボディーは、錆び一つない銀一色だ。昨日までは土で汚れていて、ところどころ汚くなっていたが、洗ってみるとその輝きが分かる。
「つくりたてみたいデスね」
汚れが落ちたケイが言った。その言葉の通り、星丸のボディーは殆ど新品と同じような輝きを見せている。まあ、新品と言っても、こいつが造られたばかりの状態を知らないから、憶測ではあるんだけど。

「はは、そう言ってもらえると、嬉しいでござるな」
言葉のように、嬉しそうに星丸は言う。金属で出来た顔は表情を作らないが、人間だったら、笑っているんだろう。
「あらあら、張り切ってるわね」
月夜おばさんの声が縁側から聞こえてきた。声につられて振りかえると、切ったスイカをのせたお盆を持ったおばさんが、縁側に立っている。
「さ、スイカを切ってきましたよ。ここらで休憩でもどうかしら」
「やったー！」
月夜おばさんからの提案に、真っ先に美緒が反応する。即座にホースを放り投げると、さっさと縁側に向かって走って行ってしまう。まだ水の出しっぱなしのホースはヘビみたいにグニョグニョと動きながら、庭に水を撒き散らす。
「まったく、ちゃんと水止めろよー」
仕方なしに、僕が代わりに水道を止めておく事にする。
「はーい」
気の無い返事を返しつつ、美優は早速スイカに手をつけていた。くそう、絶対聞いてないだろ。
「おいしそうデスね」
「だよね！」
気がつけばケイも縁側に座り、スイカを手に持っている。僕も置いていかれる訳にはいかないので、さっさと蛇口を閉じると、早足で縁側に向かった。
「お待たせ、っと」
「遅いよ！」
そう言う美優は、既に手に持ったスイカを半分ほど食べていた。
「さて、それじゃあ、いただきます」
僕も早速適当にスイカをつかむと、すぐさま被りついた。
スイカは、良く冷えていて確かに美味しかった。
「なんか、黒くて硬いのが口の中に残ってます」

「ケイさん、種は吐き出さないとダメだよ！」
「ええ！？」
ケイはあわてて口から種を吐き出す。どうやら、スイカの種も食べられると勘違いしていたようだ。
「ケイ、スイカ食べるのは初めて？」
スイカの種を知らないってことは、そうなんだろうけど。
「はい。ですけど、スイカバーだったら食べた事があります」
ああ、あの種がチョコレートのアイスね。アレの種は食べられるから、勘違いしたのか。
「種がチョコレート味じゃなくて、残念だった？」
「はい」
本当に残念そうだった。
「それに、味もスイカバーと全然違います！」
さらに、何かご立腹のようだ。
「あらあら、スイカはあまり良くなかったかね」
「いえ、こちらの方がおいしいデスよ！」
ちょっとおどけて言う月夜おばさんに、ケイは元気に答える。その直後に、もう一度スイカに口をつけた。目を細めて、本当に美味しそうにスイカを味わっている。その言葉に嘘はないんだろう。

「スイカでござるか、良いでござるなあ」
そんな僕たちを、星丸が羨ましそうにこちらを眺めていた。
「ああ、流石にロボットじゃ、スイカは食べられないか」
そう考えると、僕たちだけで食べるのは少し悪い気がする。
「あら、気が利かなかったね。何か欲しい物はあるかい」
「いやいや、皆の笑顔が見れるだけで満足でござるよ」
じつーに、爽やかに星丸は言い放つ。別に可笑しいわけじゃないのだけど、その爽やかさ１００％台詞に、思わず噴き出しそうになる。
「あら、色男」

まあ、その台詞も月夜おばさん的にはＯＫらしい。
「ははは、まあ気にしないで大丈夫でござる。拙者にしてみれば、このお天道様が最高のご馳走でござるからな」
そう言うと、星丸は腕を大きく広げて空を見る。
まるで、全身に太陽の光を集めるように。
まだ水が滴る星丸のボディーに陽光が反射して輝く。少し眩しいけれど、不快な感じはしない。心なしか、ボディー全体が太陽の光を浴びる事を喜んでいる気がする。
「こうして見ると、やっぱりさ」
「ん、なんでござるか？」
「星丸の事、空から落ちてきた星だって勘違いした、昔の人の気持ちがわかるかな」
夜空の星は、太陽からの光を浴びて輝いている。
今目の前に居る星丸も、同じように太陽からの光で輝いているように見えた。
「はは、そうでござるか」
「はい、ワタシもそう思います」
ケイも僕と同じ意見のようだ。
「はは、褒め言葉ととっておくでござるよ」
そう言い、星丸は陽の光を浴び続ける。
「ねえ、早くスイカ食べないの？　余ってるの、私が食べちゃうよ」
「あ、まってください！」
そんな中、美優は相変わらずスイカを食べ続けていた。慌ててケイも食べ始める。
今日も相変わらず日差しは強いけれど、風も少し出ていた。
少し強い風が吹き、縁側の風鈴が鳴る。水で濡れた肌に風が吹き付け、涼しさを感じる。
見上げた空には雲ひとつない。日本晴れとは、こういう日の事を言うのだろう。
「ほら、お兄ちゃんも食べないよ」

「うん、わかったよ」
美優に急かされて、僕も慌ててスイカに被りつく。今日のスイカは、特別美味しい。

第三話　かつて、星の降りた町

昼間の間、本当に長閑で平和な時間が流れていた。
けれど、それは案外長く続かなかった。
日が傾き、そろそろ夜になるかと言った時間、それは訪れた。

「うおーい！　岩三郎さん」
突然、玄関の手が勢い良くひかれた。家に入って来たのは、一人の若い男だ。
「あ、ども今晩は」
丁度、玄関に居た僕は、突然の来訪者に挨拶をした。
「お、おう、こんばんは」
それに対して、男の人は慌てた様子で簡単に挨拶を返す。
「悪い、岩三郎さんを呼んで来てくれ！」
「あ、分かりました」
男の様子は尋常ではなった。よく見ると、息もあがっているし、よほど急いでここまで来たのだろう。急がないと不味い、そう感じて、走って居間まで戻る。
居間ではちょうど、岩三郎おじさんが新聞を開いてくつろいでいた。
「おじさん、お客さんだよ」
「おう、わかった」
そう言うと、岩三郎おじさんはすぐに立ち上がり、玄関へと向かう。
僕はどうしよう。
そう言えば、まだ星丸を洗った後片付けが残っていた事を思い出し、玄関の方へと向かった。
玄関では、岩三郎おじさんと、訪ねてきた男の人が丁度対面していた。
「岩三郎さん、大変だ」

「なんじゃあ、少しは落ちつかねえか」
「は、はい」
そんな男をなだめるように岩三郎おじさんが言うと、男は一息ついて、話し始めた。
「綺羅星の爺さんが、森から帰って来ねえ」
男の口から出た言葉に、岩三郎おじさんが瞬時に顔を強張らせる。
もちろん、僕も思わず立ち止り、話に集中。きっと、顔も岩三郎おじさんと同じように、強張っている。
「確か、森に入ったのは昼頃だな」
そう、確か、雨が止んで、すぐに<森へと向かった筈だ。それが、この時間まで変えて来ていないとなると、確かにおかしい。
「ああ、いくら何でも遅すぎる。何かあったんじゃねえかと、みんな心配しているぜ」
「たく、あの爺さんも歳を考えろってんだ」
苛々したように岩三郎おじさんは吐き捨てる。
「ともかく、もう少ししたら町の何人かで探しに行こうと思うんだ、その時は、岩三郎さんも頼むぜ」
「おう、当然だ」
岩三郎おじさんが力強く返事をすると、男は安心したように肩を下ろした。
「それじゃあ、他の奴に知らせてくるぜ」
「おう、気をつけてな」
そうして、他の人に連絡するために、来た時と同じように慌てて走り出した。
「……あの爺さん、帰ってきてないのか」
「ん、おう。聞いてたのか、悠斗」
僕が傍に居た事に気がつかなかったのか、岩三郎おじさんは少し驚いて僕を見た。
「ごめん。盗み聞きになっちゃったかな」
「かまわねえよ、お前だって、あの爺さんの知り合いだろう」

まあ、あんまり印象は良くない知り合いだけど。それでも心配だ。
「ま、心配しても帰ってくるわけじゃねえ。とりあえず飯でも食うか」
そう言って、岩三郎おじさんは居間へと向かって歩き出す。心なしか、少し急ぎ足になっている気がする。口ではああ言っているけれど、動揺があるんだろう。
とは言っても、僕たちに出来る事なんて今は何もない。爺さんが居なくなったのは森の中だ。探しに森の中に入ったところで、土地勘のある人間だって迷って出られないかもしれない。都会から来た僕だったら、尚更危険だ。
「とは言っても、何もできないってのは歯痒いんだよな」
思わず独り言が口からこぼれ出る。そんな事を言っても、誰も聞いていないし意味はない。なんだか空しくなってくる。
あれこれ考えていても仕方ない。僕も岩三郎おじさんを追いかけ、居間へと向かった。
居間へと戻ると、そこにはちゃぶ台を囲んでこの家に居る人間が勢ぞろいしていた。
その中で、ケイは一人、顔を伏せていた。
「おじさん、話はしたの？」
「ああ」
おじさんは短く答える。
「昔から無茶をする人でしたけど、はあ……」
「まったく、あの時止めておくべきだったか」
月夜おばさんと岩三郎おじさん、二人して肩を落としている。居間全体に、重い空気が流れていた。普段は元気な美優も、この空気を感じ取ったのか、静かにしている。
「ま、それよりも、婆さん、飯食うか」
「そうね、お腹がいっぱいになったら、元気になるかもしれないわね」
そう言うと、月夜おばさんは立ちあがり、台所へ向かって歩き出

した。
「あ、僕も手伝うよ」
「私も！」
僕と美優もすぐに後を追う。なんというか、あの重い空気に耐えられなかっんだ。

台所には既に晩御飯の用意がしてあり、後は居間に運ぶだけだった。
適当に分担をして居間へと戻る。
帰ってきても、相変わらずケイは、沈んだままだった。
弱弱しく座るケイの姿は、見ていると胸が痛くなる。せめて、励ましの言葉をかけよう、軽い冗談でも言ってみよう。そう思ったけれど、言葉が口から出なかった。
仕方なしに、僕は逃げるように居間を出て、台所へ向かう。結局、僕は無力だ。

食事の時間は、無言の家に過ぎて言った。
昨日はにぎやかだったけれど、今日は食卓を囲む全員が無言だった。それどころか、ケイは食欲がないようで、大分食事を残していた。
今日の食事は、美味しくなかった。
「はあ……」
食事が終わり、片付いた居間の中でため息をつく。
居間には、相変わらずこの家の人間が揃っている。お風呂に行く訳でもなく、部屋に戻るわけでもなく、ただその場に居た。
「まったく、ケイ、心配せんでもいい」
流石に見かねたのか、岩三郎おじさんはケイに声をかけた。
「でも……」
「大丈夫じゃ、もう少ししたら、この町の奴、全員で探しに行く。安心して待っていな」

胸を強くたたいて、岩三郎おじさんはそう宣言する。
「は、はい」
ケイは少しだけ顔を上げて僕たちの方を見る。相変わらず、浮かない顔をしている。
「大丈夫だよ、ケイさん！　岩三郎おじさん、すっごく強いんだから」
「うん。きっと見つかる。大丈夫だよ」
岩三郎おじさんは、生まれた時からこの町に住んでいると聞いた事がある。土地勘はあるだろうし、何より何十年も生きてきた大人だ、そんな人が探しに行くんだ、絶対に見つかるはずだ。
「でも、やっぱり不安デス」
けれど、それでもケイの不安を完全に取り除く事はできないようだった。
「パパ、こう言っていました。グランパが死んでしまえば、パパは、グランパを怒らせたままになってしまう。生きているうちにもう一度あって、今度はよろこばせたい」
たとえ喧嘩別れしても、親子なんだろう。ケイの父さんも、このままの関係で良いとは思っていなかったんだ。
「だから、ケイに古文書を持たせて、この町に来させたんだね」
正直、回りくどい方法だとは思うけれど、それがケイの父さんが考えた、最善の方法だったんだろう。
「だから、あのお爺さんが居なくなるのは、嫌なんだね」
「はい。それに、ワタシも、最初は怖い人かと思ってました。けれど、今日お話しをしてみてわかりました。あの人は厳しいけれど、優しい人デス。本当はワタシに優しくしたいのデスけれど、それが上手くできないみたいデシた」
そうだろう。今日、森に入ったのだって、ケイに無茶をさせないためだ。
多分、ケイの父さんと喧嘩をせず、この町でケイが育ったのなら、孫びいきの爺さんになっていた事だろう。それが、本来の形だった

のかもしれない。
狂っていた関係が元に戻り始めたんだ、それが全て無に帰すかもしれない。それは、悲しい事だ。
「ほんと、罪な男だ、あいつめ」
岩三郎おじさんが、静かにつぶやいた。
「そうだね。絶対に帰って来てもらわないと」
「おうよ！」
岩三郎おじさんが強く返事をした。
「おーい、岩三郎さーん」
それと同時に、玄関の方で誰かが呼んでいる声が聞こえて来た。あの声は、確か爺さんが居なくなった事を、知らせに来てくれた人の声だ。
「さて、行くか」
そう言うと、岩三郎おじさんは立ちあがり、玄関へと向かう。
「悠斗、お前も来るだろう」
当然だろ、そう言った風に、岩三郎おじさんは聞いてくる。
「うん」
断る理由なんてない、僕はすぐに立ちあがった。

「待たせたの」
「言え、大丈夫っす」
玄関には、やはり夕食前に来た男の人が立っていた。相変わらずあちこちを走り回っていたのか、随分と疲れているように見える。
「爺さんは？」
「見つかってないっす」
相変わらず、あの爺さんは見つかっていないらしい。
「そうか、なら、探しに行くか」
「ええ、それで呼びに来ました」
それだけ聞くと、岩三郎おじさんはすぐに靴をはき、外へと出る。
「おーい、月夜。懐中電灯持ってきてくれ」

「はいはい」
待ってました、と言わんばかりにすぐに月夜おばさんが懐中電灯を二つ持ってやってくる。どうやら、既に用意して待っていたようだ。
「二人分、ですか？」
「おう、ワシと悠斗の二人分だ」
「え！？　この子を連れていくんですか」
僕が行く、それを聞いて、男の人は驚きを隠せないでいた。無理はないよなあ、正直、高校生とは言え、夜の森に入るのは危ないだろうし。
「大丈夫じゃ、こいつは星の巨人を見つけてきたくらいだ、頼りになるぞ」
「けど、やはり」
岩三郎おじさんに言われても、男の人は納得しかねているようだ。
「僕の友達のお爺さんが居なくなってるんです。少しでも、力になります！」
僕も、自分の気持ちを言葉にする。それを聞いても、男の人は考え込んでいる。ダメなんだろうか。
「うーん、いくらなんでも、危ないだろ」
「ならば、拙者が悠斗殿と一緒に行動しよう」
門の外から、機械で作った合成音が聞こえてきた。星丸だ。
「星丸、来てくれるの？」
「当然でござる」
星丸は力強く答える。よかった、星丸が一緒に居てくれるなら、百人力だ！
「わかった。それだったら、頼りにさせてもらうよ」
男の人も、僕の事を認めてくれた。
「あ、あの……」
気がつけば、ケイが後ろに居た。相変わらず不安そうな顔で、僕たちを見ている。

「あの、ワタシも行きます」
「ダメじゃ」
ケイの提案を、岩三郎おじさんが即座に却下した。
「あの、ワタシは……」
納得できないのか、ケイはなお岩三郎おじさんに食ってかかる。
「あの爺さんはな、お前さんに無理をさせないために、一人で行ったんじゃ。だから、ここで無理をしたら、その意味がなくなるだろう」
「……」
岩三郎さんの言葉に、返す事がないのか、そのままケイは黙ってしまった。
「さ、行くぞ悠斗」
そう言うと、ケイを残して、岩三郎おじさんはさっさと家を出てしまう。
「あ、まずは広場に集合っす、勝手に行かないでください」
慌てて、僕たちを呼びに来た男の人も駆けだした。僕もすぐに行こう。
「……絶対、大丈夫だよ」
ケイにそう言い残し、僕も岩三郎おじさんを追いかける。
すぐ走ると、岩三郎おじさん達は、止まって待っていてくれた。
もちろん、星丸もだ。
「さて、悠斗殿、頑張るでござるよ」
「うん」
星丸の言葉は、頼もしかった。
既に空は暗く、周囲の山と森は暗く覆われている。月明かりこそあるけれども、それでも暗い事には変わらない。正直、こんな状態で森に入るのは不安だけれども、後ろに居る星丸の巨大は、頼もしかった。
「頼りにしてるよ」
「拙者もでござるよ」

お互いに意志を確認する。大丈夫だ、僕たちだったら、絶対に大丈夫。

町の広場につくと、そこには十名近くの男の人が集まっていた。みんな、岩三郎おじさんより少し若い、三十代から四十代の男の人だった。

「お、来たか、岩三郎」

そのうちの一人が岩三郎おじさんの姿を見とめると、すぐにこちらに近づいて来た。

「お、お前は祭りの準備で来た」

良く見ると、その人は祭りの準備で何度か話をした人だった。

「ども」

「こんな時間にどうしたんだ？」

「僕も、一緒に森に入る事になりました」

「なに！？」

やっぱり、他の人も僕が森に入るのは反対のようだ。

「大丈夫でござる、拙者が居るでござるよ」

「ふう……まあ、星の巨人の旦那が居てくれれば、大丈夫か。それに、お前さんがしっかりしてるのは、何度も見てきたしな」

星丸の言葉もあり、男の人はすぐに納得してくれた。よかった、正直、猛反対されて家に引き返す事も考えていたし。

「悠斗、暫く待っていろ。どこを調べるか、相談してくるからな」

「わかった」

僕の返事を聞くと、岩三郎おじさんは少し離れたところで、他の大人たちと話し合いを始めた。

「また、待ちか」

正直、この辺りの土地に明るくない僕が話し合いに参加しても仕方がないけれど、この暗闇の中で待たされるのは辛い。勝手に一人で行ってしまおうか、少しだけそんな考えもよぎったけれど、そうなったら捜索する人間がもう一人増えると言う訳の分からない事態

になる。
「悠斗殿、男には、どっしりと構えて待つ事も肝心ですぞ」
僕が焦っている事を分かったのか、星丸はそんな事を言った。
「ま、そうか」
その通りだ、頭では分かっているけど、どうにも納得しきれていないみたいだ。
「こう言う時は、星を見るでござるよ」
「星？」
星丸は、空を見上げる。僕もつられて見上げると、昨日の夜と同じように、数えきれ程の星が夜空に瞬いていた。
「拙者と悠斗殿は、この同じ空の元にいる」
確かに、僕たちはみんな、同じ空の下に居る。そして、僕と星丸は、きっと同じ景色を眺めている。
「それは、光太郎殿も同じでござる」
「あ、うん、確かに」
落ちついて空が見れる状況であるかは分からないけれど、同じ空の下に居る事には変わりはない。
「ならば、心配は無用でござろう。たとえ少し離れていようと、同じ空の元に居るのなら、すぐに会いに行けるはずでござる」
「なーるほど。ちょっと強引だね」
「はは、そうでござるか」
「でも、納得した」
同じ空の下。しかも、すぐ傍の森の中に居るんだ、絶対に見つかるはずだ。
そう考えると、少しだけ頭が冷えたような気がした。
岩三郎おじさんの方を確認すると、まだ話し合いを続けていた。多分、まだ時間はかかるだろう。ずっと立っているのもしんどいので、僕はすぐ傍にあったベンチに腰を下ろす。
「お兄ちゃーーん！」
丁度その時だった、美優の、僕を呼ぶ声が聞こえてきた。

「美優！？」
驚いて声が聞こえてきた方向に振りかえると、美優がこちらに向かって走って来ていた。
「はあ……はあ……」
美優は僕の傍に来ると、荒い息を吐き出す。額には汗が浮かんでいる。間違いなく、ここまで全力疾走で走って来たのだろう。
「どうしたんだよ、美優」
どう考えても、尋常な様子ではない。
「ケイさんが、一人で森に入っちゃったんだよ！」
美優が大声で叫んだ。その言葉に、広場に居た人間全員が美優に振りかえる。
「お、おい、ケイって、綺羅星さんの娘だよな」
「それが一人で森に入ったって」
明らかな動揺が、この場に広がっている。爺さん一人を見つけるだけでも大変だと言うのに、もう一人探すべき人が増えたんだ、そりゃそうだろう。それも、まだ若い女の子を、だ。
「くっそ！」
「悠斗、落ちつけ！」
思わず、走りだしそうになる僕に、岩三郎おじさんが制止の声をかける。
「……はい」
その声を聞き、少し頭が冷えた。僕は、走りだしたい気持ちを抑えて、その場になんとかとどまる。
「すぐに話を纏める、待っていろ」
「うん」
感情を抑えて、なんとか返事を口から絞り出した。
「お兄ちゃん」
美優の小さな声が聞こえてきた。声に振りかえると、美優は不安げな顔で、僕の方を眺めている。
「……大丈夫だよ、爺さんも、ケイも、みんなで探せば、絶対に見

つかるから！」
半ば自分に言い聞かせるように、僕は言った。

それから数十分して、僕たちはようやく森の入口までやって来た。正直、途方もなく長い時間を過ごした気がする。
話し合いの結果、二人一組になって、それぞれの担当箇所を決めて爺さんたちの探索を行う事となった。当然だけど、僕のパートナーは星丸だ。
「星丸、頼むよ」
「こちらこそ、頼りにしているでござるよ、悠斗殿」
お互いに意志を確認すると、頷き合う。
高校生の男とロボット。正直、デコボコなコンビではあるけれど、大丈夫、僕たちだったらやれるはずだ。
「ところで、悠斗殿」
「どうしたの、星丸」
「拙者、どうやって森の中に入ればいいでござるかな」
「あ……」
星丸の身体を見る。僕の身長の三倍くらいの高さがある。正直、木が生い茂り、足場も悪い森の中を歩く事は難しいだろう。
「えーと、ビーム兵器とかで、森を焼いたら入れるんじゃないかな」
「悠斗殿、そうしたら中に居るケイ殿も燃えるでござるよ」
「うん、やっぱりそうだよね」
我ながら、馬鹿らしい提案をした。
「となると、どうしようか」
困った。と言うか、なんで誰も気がつかなかったんだ！
「ふうむ、悠斗殿、ならば、拙者の背中をみてござらぬか」
そう言うと、星丸は僕に背を向けて地面に座り込む。丁度、僕の頭くらいの高さに、星丸の背中が見えた。
「背中を、どうすればいい？」
「ちょっと待っていて欲しいでござる。今、コックピットを開ける

でござるよ」
突然、星丸の背中から何か空気が抜けるような音がして、装甲の一部が上に持ち上がる。持ち上がった装甲の内部を覗きこむと、人一人分くらいの空間があった。
「その中に、手のひらほどのサイズの、丸い機械があるでござるか」
「えーと、ちょっと待ってね」
空間内部を懐中電灯で照らす。何かのボタンやメーター、モニターがいくつも並んでいた。
「なるほど、コックピットか」
確かに、ＳＦ映画やロボットアニメのようなコックピットだった。昔は、星丸の主がこの中に座って、操縦する事もあったのだろう。
「ま、今はそれよりもっと」
星丸に言われた探し物をしないといけない。懐中電灯で辺りを照らして、ようやくそれらしきものを見つける。手に持ってみると、思ったよりも軽かった。大きさは僕の手のひらに収まるくらい。ちょっと大きなバッチみたいな感じだ。
「見つけたよ、星丸」
コックピットから出ると星丸の正面に移動し、懐中電灯で照らしながら星丸に見せる。
「おお、それで間違いはないでござる」
どうやら、探し物は間違って居ないようだ。
「これ、なんなの？」
「それは通信機でござる。持っていれば、星一つ離れていても通信が出来るでござるよ。
「へえ……」
一見するとただのバッチだけれど、これもオーバーテクノロジーの産物なんだ。
「拙者、森の中には入れないでござる。なので、上空から探す事にするでござるよ」
「なるほど。まあ、仕方ないか」

「何か危ない事があったなら、すぐにその通信機で知らせて欲しいでござる」
「うん、わかった」
強く通信機を握りしめ、星丸に返事を返す。

森の中に入ると、そこは真っ暗だった。星明かりすら通らない森の中は、本当に何も見えない。懐中電灯で照らされた部分だけ、ぽっかりと暗闇の中に世界が切りだされたようだった。
「うう……流石に怖いな」
正直、足元もおぼつかない。すこしゆるい地面を踏んだだけでも、驚いて心臓が跳ね上がる。
『大丈夫でござるよ、悠斗殿』
僕を励ますように、ポケットに入れた通信機から星丸の声が聞こえる。良く見えないけれど、上空では星丸が僕たちを見守ってくれているはずだ。
「わかった」
そう考えると、少し安心できた。
それに、僕はまだ星丸が見守っていてくれると分かるから良い。先に入ったケイは、一人で不安な筈だ。僕が怖気づいている訳にはいかない。

「くう、しくじったわい」
悠斗達が森に入ったころ、光太郎は一人愚痴を吐いていた。
彼の周囲は完全な闇。僅かな月明かりが木々の間から入ってくるが、一メートル先もまともに見えない状態だった。
「くそ、なぜこんな事になったんじゃ！」
一人叫ぶが、それに応える人間は居ない。
暗闇の森中、一人たたずむ老人。それは、誰が考えても非常に不味い状態だった。普通は、こんな時間に森には近づかない。近づくとしても、万全な備えをして然るべき事だ。

だが、光太郎の手には、懐中電灯すらない。外部に連絡するための携帯電話もなく、まさに絶望的な状態だ。
そもそも、光太郎自身も、こんな状態になる事は想定していなかった。
事実、光太郎は森の中に入ると、昨日悠斗達が進んだ何倍ものペースで進み、まだ陽が高いうちに鍵を回収して、帰路へとついていた。
光太郎も、夕食までには帰れると考えていた。
だが、そうそう世の中は上手くいかないようだ。帰路を急ぐ彼の前に、突如巨大な黒い物体が立ちはだかったからだ。
「何者だ！」
気の強い光太郎は、突然の来訪者にすぐさまどなり声を浴びせかける。だが、返事は帰って来ない。
「な……」
当然だ、その来訪者は人間ではなく、熊。
巨大な黒い熊だったからだ。
熊は返事代わりに低いうなり声を出すと、光太郎に向かってゆっくりと歩いて向かってくる。それに恐怖を感じた光太郎は、一歩一歩。後ずさりをする。
そのまま、奇妙なにらみ合いはしばらく続いた。
熊が一歩脚を出せば、光太郎は一歩後ずさる。幸いな事に、熊はすぐさま飛びかかるようなことはせずに、ゆっくりと。だが、確実に距離をつめている。
これでは埒が明かない。そう考えると、光太郎は意を決して茂みの中へと飛び込んだ。そのまま息が切れるまで走り続けた。
気がつけば熊の気配は消えていたが、同時に自分自身も完全に迷ってしまった音に気がつく。
そうして、森の中をさまよい、日が暮れて現在へと至る。
「ふう……」
暗闇の中、爺の溜息が木霊する。思えば、ここ数日の自分は失敗

ばかりだと、改めて光太郎は考えていた。
おかしくなったのは、もちろん孫娘を名乗る少女が自分の前に現れた事だった。
最初、光太郎はその事が信じられなかった。だが、その顔を見ているうちに信じる気になった。顔立ちに、息子の面影を見たのだ。
それと同時に、激しい感情が自らの中に生まれたのを感じた。
息子とは、完全な喧嘩別れだった。自分の意志に反対したのならともかく、家宝まで持ち逃げして、今まで連絡がなかった息子。
それどころか、自分の代わりにまだ若い孫を差し向けてくる。そう考えると、頭に完全に血が上り、口からは罵声が飛びだしていた。
『ごめんなさい！』
自分を恐れる孫娘の姿を見ても、光太郎の感情は収まらなかった。
本当は、分かっていた。目の前で怯えるこの娘には、何の罪もない事を。
例え怒鳴ったとしても、何の解決にもならない事を。
本当は、こんな田舎町まで訪ねてきた孫娘を、労わりたいと言う自分の感情にも。
だけど、どうしようもなかった。怒りと言う感情が暴走し、心が理性をはねつけたのだ。
あの日、見知らぬ兄弟が間に立ってくれて、どれほど助かった事だろうか。あの二人が居てくれて、少しだけ自分の頭を冷やす事が出来た。
翌日、光太郎はどうにか孫娘と話が出来ないか、ひそかに後をつけながらうかがっていた。コソコソと若い娘の後を追いかける自分は、さぞ滑稽な事だったろう。
彼は物陰から孫娘を見守っていた。その最中、見たくもない光景を見た。
町の人間が彼女に向かって冷たい視線を投げかける事を。あまつさえ、早く出て行けと、忠告と称して暴言を吐くところを。
自分が怒りを爆発してしまったばかりに、孫娘はこのような仕打

ちを受けている。それを考えると、光太郎はケイの前に出る勇気を失い、ただ見守るだけで一日が終わってしまった。その日ほど、光太郎は自分事を愚かだと思った事はない。

そして、さらに翌日、光太郎は性懲りもなく、孫娘の後をつけていた。

昨日と違っていたのは、少年が孫娘の傍に居て、励ましてくれているといことだった。光太郎は、口にこそ出さないが、その少年と、その妹に感謝した。少しでも孫娘に気を使ってくれる人が居てくれた事、勝手なことながら、それが光太郎の心を、少しだけ軽くしたのだ。

孫と少年たちは、町を外れて森まで来ていた。まさか、森に入るのでは。孫娘に森に入る事が出来るのか？　入ったとしたら、無事に出る事は出来るのか？　光太郎の頭に、不安がよぎった。

少年の妹が、森に入り、孫娘までも森に足を踏み入れようとした時、光太郎は思わず声をかけていた。

優しく言うつもりだったが、光太郎の口は言う事を聞かず、相変わらず厳しい言葉を孫に浴びせてしまう。

また、出会った時と同じように顔を伏せる孫娘を見て、光太郎は自分が情けなくなった。

またやってしまった。どうして自分は、思ったように言葉が出せないのか。何十年も生きた老人とは思えない、情けない疑問が頭の中によぎる。

だが、そんな彼に対して、孫娘は顔を上げ、正面から向かい合った。

そして、もう一度話をしたい、そう行って来たのだ。

その言葉に、光太郎が感激を覚えたのは、言うまでもないだろう。

光太郎は、自分の頭が急速に冷めていく事を感じた。孫娘ともう一度話が出来る。

何とも言えない、幸せな心地で、光太郎は森を離れた。

だからだろう、その後に星の巨人を探し当て、広場に孫娘が戻っ

て来たとき。思っていたよりもずっと楽に言葉が出てきた。
そして、今日。ケイは美優とともに、光太郎の家へと再び訪れた。
自分の孫娘が、再び家に訪れてくれる。それも、友達を連れてだ。
その事実は、ここ数日迷走していた光太郎には、希望の光が見えたようだった。
家で交わした言葉は、そう多くない。けれど、満ち足りた物だった。
相変わらず、光太郎は素直になれずに、孫娘をそっけなく扱うが、孫娘をそれを分かって来たのか、笑顔で応対する。
かつて離れた家族が、ようやく形を取り戻しかけたところだった。

「まったく、なんでこんな事になるか」
道は開けたけれど、相変わらず光太郎は暗い森の中。それも、近くに熊が居るかもしれない状況だ。
歩くだけでも相当辛く、体力も尽きかけていた。せめて灯りがあれば良いと思うが、あいにくと月も星も見えない。
「もう一度、孫に会いたかったが」
そう、光太郎が愚痴を吐いた時だった。
懐中電灯からの細い明かりが、光太郎の視界に入った。その明かりは、草をかき分ける音とともに、急激に近づいてくる。
「ハイ、呼びましたか！」
そして、この暗い森の中には場違いなくらい明るい声とともに、彼の目の前に、孫娘、ケイが現れた。
「お、おお……」
光太郎の頬に、涙が伝う。
「グランパ、泣いているんデスか？」
そんな彼を、ケイは心配そうに眺めている。
「だ、大丈夫じゃ。なんともない、何ともないんだ」
その言葉に、嘘はない。
彼女の登場で、光太郎は萎えかけていた心が再び動き出すのを感じていた。

「心配かけて、すまんの」
今までの彼からは考えられないほど、しおらしい声で、素直に自分の気持ちを伝える。
「いいんですよ、ワタシはマゴですから」
そして、ケイは笑顔で答える。
「……ふはは」
光太郎の口から笑みがこぼれた。
ここ数日の自分は、本当に何だったのだろう。年甲斐もなく暴走し、無茶をして孫に迷惑をかけた。けれど、孫娘はこんな迷惑な爺でも、認めてくれた。
ならば、もう意地を張る必要はない。
「ケイ」
光太郎がケイの名を呼んだのは、これが初めてだった。
「はい？」
「今度、バカ息子と一緒に町に来るんだ」
「！　それって」
「あのバカ息子には、言ってやりたい事がいくつもある。また喧嘩になるかも知れんが、見逃してくれ。もう一度、話がしたいんじゃ」
それは、光太郎が長年胸の奥にしまい続けてきた願いだった。
「はい！」
ケイはその言葉に強くうなずく。
数十年前、どこかで歯車が狂ってしまった親子。すぐには溝は埋まらないであろうが、これが関係を修復する、大きな一歩である事は間違いない。
「はやく、町に戻りましょう！」
「そうじゃな」
二人は再び歩き出した。そのまま森を抜け、町に帰る。そうすれば、すべては上手く終わるはずだった。
だが、それは許されなかった。
二人の傍で、黒い影が動いた。

「なんだ」
それは長く生きてきた経験か。光太郎は、とっさに危険なものであると判断した。
その判断は間違って居なかった。
暗闇の中、ケイは持つ懐中電灯の明かりに映し出したのは、大きな黒い毛むくじゃらの獣。
昼間、光太郎が遭遇した熊であった。
「ク、クマ！？」
思わずケイは驚き、懐中電灯を地面に落してしまう。そのショックで明かりが消え、再び周囲は暗くなる。
クマは、低いうなり声をあげる。暗闇で何も見えないが、その声だけが響き渡る。
「グランパ……」
「大丈夫じゃ」
光太郎は、強くケイの手を握った。握った手からは、ケイが一震えている事が伝わって来た。
ここに居ては不味い、直観的にそう感じた光太郎は、ケイの手を引いて走り出す。
「こっちじゃ」
「はい！」
暗闇で辺りは見えない。正直なところ、光太郎も自分が無謀な行為をしていると感じられた。だが、猛獣の前でただ立っているだけと言うのは、耐えられなかった。他の手立てを考える間もなく、走りだしていた。
仮に己一人であれば、光太郎はもぅ少し落ち着いて決断が下せただろう。だが、隣に立っていたのは孫娘だ。既に爺であるが、自分が孫娘を守らなければならない。そう考えた時、光太郎は正常な判断力を失ってしまった。
「はあ……はあ……」
既に何時間も山の中で走り回っていた光太郎の体力は、既に限界

だった。
「グランパ！」
そんな光太郎の体調を看破し、ケイは心配の声を上げる。だが、光太郎は走る事をやめない。このまま心臓が破裂するまで走る。そのつもりだった。
「きゃっ！？」
だが、それも長くは続かなかった。
ケイが、木の根なのか、石なのか、はたまた名にかの生き物なのか。何者かに躓き、転んでしまった。当然、手をつないでいた光太郎も、同じように地面に倒れ伏す。
後ろからは、熊の足音と、荒いうなり声。
急いで逃げなければならない。光太郎はそう直感し、立ちあがろうとするが、身体は動かない。
「ケイ、お前だけでも」
「そんな、ダメですよ！」
せめて孫娘だけでも先に行かせようと促すが、彼女はそれに従わない。
こんな時でも、良い子だと、光太郎は思った。
何故こんな事に。こんな出来た孫娘が自分には居て、これからようやくまともな関係が築けると言うのに、目の前には危機が迫っているのか。
誰か助けてほしい。自分だけはいい、だがせめて、孫娘だけでも。そう、強く願った。
「うおりゃあああ！」
その時、熊の後ろから叫び声が聞こえた。
「ユート！」
まるで救世主を見るかのような目で、ケイはその声の主の名を呼んでいた。
嫌な予感と言うのは、当たる物なんだ。正直、人生は楽観的に行

きたいのだけど、そうはいかないと思いっきり実感した。
森に入ってすぐ、僕は誰かが話している声を聞いた。遠く離れていたが、森の中は静かで、意外と遠くの声も聞こえてくる事にビックリした。
早速、話し声を頼りに進んでみたが、途中で急に叫び声が聞こえ、誰かが全力で走り去る音に変わった。
「くそ、なんだよ」
慌てて走って進んだら、急に脚元に何かがぶつかった。
「これは……」
それは、誰かが落とした懐中電灯。その近くには、人二人分と、大きな獣の足跡があった。
そこまで見て、嫌なイメージが頭をよぎった。その内容が、今目にしているこの状況だ。
少し先に、行方不明の爺さんとケイが居る。そして、なぜか熊がその二人を追いかけている。
「大ピンチじゃねえかよ」
思わず口から言葉が漏れた。咄嗟に脚元にあった岩を拾うと、全力で熊に向かって投げつける。
「うおりゃあああ！」
今まで出した事もないくらいの速度で岩は熊の頭に直撃した。正直、すごい痛いと思う。
「ユート！」
僕の叫び声に気がついたのか、ケイがこちらを向いて僕の名を叫んだ。
「ケイ、これ！」
すぐに先ほど拾った懐中電灯をケイの方へ投げる。こう言う時、人間ってのは普段よりも上手く出来るもんだ、火事場の馬鹿力って言葉もあるしね。上手い事ケイは、僕が投げた懐中電灯をキャッチしてくれた。
よし、これであの二人も明かりを確保できた、上手くいったぞ。

「グルルル」
そんな状況とは対照的に、追いかけっこを邪魔されたクマは、僕の方を向く。
明らかに、敵意を持った顔をしている。
「上等だ、こっちに来い！」
願ったり叶ったりだ。ケイ達に注意が行くより、僕の方に来る方が、何倍もいい。
「ガアア！」
僕の挑発が分かったのだろうか、熊はうなり声を上げて僕に向かった走って来た。正直、すごい怖い。
「ほら、さっさと追って来い！」
即座に、僕も熊とは反対方向に全力でダッシュ。捕まってたまるもんか。
「ぐげ！？」
と思ったけれど、さっそく木の根っこらしきものにぶつかってバランスを崩した。思わず前のめりになるが、なんとか倒れるのだけは回避できた。だけど、正直森の中を全力疾走って、無理じゃないか。ただでさえ障害物がおいのに、今は暗いし。
走っている今だって、脚や腕に木の枝がぶつかるわ、石につまずきそうになるわけで、正直酷い状態だ。
「！？」
後ろから何かが突進してくるような威圧感を感じた。
咄嗟に横っ跳びをすると、今まで僕が居た場所を、轟音を立てながら黒い何かが走り抜けた。間違いない、熊だ。
熊は僕が突然避けた事に気づかず、そのまま減速せずに突進し、正面の木に激突した。
激しい音が森に響いた後、葉っぱが頭上から落ちてくる。
「やった、のか」
気絶でもしてくれたら楽なんだけど。淡い期待を込めて懐中電灯で確かめると、丁度熊の顔を照らしてしまった。

熊の目には、明らかに怒りの感情が宿っていた。
心なしか先ほどよりも息が荒く、殺意すら感じる。正直、すさまじく怖い。
「冗談じゃないよ！」
捨て台詞を残して、さっさと駆けだした。
けれど、相変わらず後ろからは熊の足音が近づいてくる。不味い、絶対に不味い。
こうなったら、最高の味方に頼むしかない。
そうはんだすると、即座に通信機を手に取る。
「星丸！」
『どうしたでござるか、悠斗殿』
切羽詰まった僕とは対照に、通信機からどこか呑気な声が聞こえてる。
『どうにも、先ほどから走っているようでござるが、夜道を走るのは危ないでござるよ』
「熊に追われてるんだから仕方ないよ！」
『なんと！？』
流石に、僕の状況を聞くと、驚いている。と言うか、自分でもびっくりだよ！
「星丸、僕の場所、分かる！」
通信機に向かって叫ぶ。
星丸のパワーだったら、熊だってぶっ飛ばされ筈だ。今も上空で僕を見守っているのなら、すぐに来てくれる筈だ。
『すまない、分からないでござる』
「うおい！」
分からないのかよ！　と言うかこの状況でそんな事言うのか！
『いやあ、通信機からの信号で、大体の位置は分かるのでござるが、最終的には有視界の情報がなければ、判断が出来ないのでござるよ』
「だったら適当に降りて来てよ！」
『一度降りたら、再び動くのが難しいでござる』

言われてみると、確かにそうだ。身体が大きいってのは、結構制限が大きいんだろう。
「となると、一度開けている場所に出ないとダメか」
『すまないでござる』
そこで一度、通信機から顔を話す。
開けている場所。どこかにあったか……思い出せ、昨日ケイ達と森を歩いた時、どこを進んだのか。
「そうだ、川だ！」
川沿いだったら、星丸を邪魔する木々もない。なんとかなる！
迷っている暇はない。すぐさま昨日の記憶を頼りに方角のカンをつけ、方向転換する。
もう、熊のうなり声は、すぐ近くまで迫っていた。怖くて後ろを振り返れないが、足音まで大きく聞こえてくる。
「見えた！」
ようやく、森の切れ目が目の前に見えた。水が流れる音も聞こえてくる。あと少しだ。
突如、後ろから大きな熊の鳴き声が聞こえた。それと共に、背中の方で何か太い物が空を切る感覚がする。
「っ！？」
それと同時に、肩が何かに切られるような痛みが走った。
怖いから確認しないけれど、たぶん肩から血が出てる。
まずい、熊に何かやられた。
「くっそ」
痛みで身体のバランスが崩れ、目の前に思いっきり突っ込んんだ。
咄嗟に頭が地面に激突するのは避けたけれど、そのままの勢いで地面をゴロゴロと転がる。
「だけど、やられるか！」
頭がグラグラして気持ち悪いが、それでも脚を地面に突き立てて、立ちあがる。必死に足を前に出して、茂みをなんとか抜けた。
「見えた！」

茂みの先はには、昨日訪れた川原。
「空が見えた！」
そして、満点の夜空だった。それを見た瞬間、急に力が抜けた。
情けない事にまたバランスを崩して、思いっきり前に倒れこむ。
もう、走れそうになかった。
振りかえると、熊は、すぐ後ろまで迫っていた。もう、余裕はない。
「星丸、ここだ！！」
だから、僕は力の叫んだ。最強の味方を呼びためにに。
『承知！』
通信機から、僕の願いに返事が帰って来た。
その時、光が空から降りてきた。
それはさながら、夜空を切り裂く流星のように、早く、強く、輝いていた。
流星は燃え尽きることなく、僕の目の前へと轟音と共に降り立つ。
「待たせたでござるな」
それは、月明かりに輝く白銀のボディーを持つ星丸。
昔話で語られるような昔、この町に訪れた少女が見た流星のように、空から降り立った星の巨人は、僕を守るように立つ。
その背中は、何よりも力強く感じた。
「あと、よろしくね」
なんだか、力が抜けた。
「もちろんでござるよ！」
星丸の口調は、極めて平静だった。
間違いない、星丸だったら、熊だって相手にならない筈だ。
当の熊も、突如空から現れた、自分の数倍の大きさを持つ相手に困惑……いや、怯えていた。
先ほどまでの荒い息はなくなり、完全に固まっている。
「熊殿」
そんな熊に対して、星丸は静かに告げる。

「そなたらの住処に立ち言った事は謝ろう。だが、拙者達にも事情はある、ここは、見逃してくれぬか」
星丸は説得を続けるが、熊は立ち去ろうとしなかった。
「ふう……」
仕方ない、そう言った声が聞こえてきそうな溜息だった。
「ならば、少し脅させてもらおうか」
そう言った直後、星丸の右腕から、モーターが回りだすような音が聞こえてきた。
その音にあわさり、星丸の右腕が輝き始める。
「これは、当たると痛いでござるよ」
星丸は右腕を高く振り上げ、地面にたたきつけた。
何かが爆発したような音が響き、振りおろした拳から火花が飛び散る。
拳が触れた地面がはじけ飛び、砕けた岩や土が辺りに飛び散った。
「っつ！？」
思わず、目を閉じた。
飛び散った石が、僕の頬に当たる。
「ど、どうなったんだ」
再び目を見開いた時、熊は一目散に森の中へと逃げだしていた。
そして、星丸が拳を振りおろした場所には、小さなクレーターが出来ていた。
「悠斗殿、大丈夫でござったか」
そして、星丸は何もなかったかのように、僕に問いかけてくる。
「大丈夫、だよ」
そう、大丈夫だ。危機は、乗り越えたんだ。

そのまま暫く川原で待っていると、森の中から灯りが見えた。
「あ、ユート！」
灯りの主は、ケイ。
「おお、無事だったか」

そして、散々僕たちを振り回した、あの爺さんだった。一言くらい文句を言ってやろうと思ったけれど、家で待っていた時と違い、暗闇の中でも分かるくらい晴れた顔をしているケイを見たら、そんな気もなくなった。
「二人とも、無事？」
見たところ、目立った怪我はないけれど、暗いから見えないだけかもしれない。
「ユートの方が怪我をしてますよ！」
「悠斗君、その方の怪我はどうした」
逆に心配されてしまった。
「まったく、悪くならないうちに治療をしないと。立てるか？」
「え。、あ、はい」
爺さんは、僕に近づくと、肩を貸してくれた。
なんだろう、昼間までの態度に比べると、随分と優しい。正直、少し気持ち悪さを感じる。
「グランパ、反対側から支えますよ」
「おう、頼むぞ」
ケイも僕に駆けよると、爺さんが僕の右肩を。ケイが左肩を持って、立たせてくれた。立ち上がる時も、二人妙に息が合っている。
「……二人とも、仲直りしたの？」
そうとしか思えなかった。
「はい、もちろんデス！」
「まあ、そう言う事だ」
ケイは笑顔で。爺さんは、まだ少し照れくさいようで、僕から少し顔をそらしながら答えてくれた。
「そっか、よかった」
心の底から、ホッとした。同時に、この二人の力になれて、本当に良かったと思えた。
「いやあ、良くは分からないが、丸く収まったようでござるな」
「うん、星丸のおかげでね」

「なに、拙者は何もしていないでござるよ」
そんな事ないんだけどな。
「星丸が居なかったら、僕も危なかったんだし。そこは堂々と肯定してよ」
「そうでござるな」
星丸も納得してくれたようだ。
「それに、仕事をし足りないなら、もう一仕事頼めるかな」
「もちろんでござるよ」
星丸は、まだ力があり余ってる。そんな感じで身体を捻り、明るく僕の返事にＯＫをくれた。
「僕たちを連れて、町まで飛んで欲しんだ」
「おお、それが良いでござるな」
「もう、森の中は勘弁だよ」
「そ、そうじゃな」
流石に数時間迷って相当こたえたのか、爺さんの返事には元気がない。
「それでは、三人とも、拙者の手のひらに乗ってくだされ」
星丸は腰を下ろすと、僕たちの前に手を置く。
ケイと爺さんに助けられ、その上に乗る。
「それでは、飛ぶでござるよ」
「わかった！」
僕の返事を聞くと、昨日と同じように星丸は音もなく空へと昇り始める。
「おお！？」
何とも言えない浮遊感に驚いたのか、爺さんが驚きの声を上げていた。
「大丈夫でしょ、グランパ」
そんな爺さんの腕を、ケイはぎゅっと握りしめている。
随分と驚いていたから、爺さんバランスを崩して落ちたら大変だとか考えたけど、そんな心配はなさそうだ。

星丸は僕たちをのせて、空を飛ぶ。
昨日一緒に飛んだ時は昼間だったけれど、今日は夜だ。太陽の代わりに月が大地を照らし、星が夜空に溢れている。
眼下を見降ろすと、暗闇の森と、その間にポッカリと浮いた星のように、星空町の灯りが見えた。
「変わらない、でござるな」
誰に言うともなく、星丸はつぶやいた。
「何が？」
「人、でござるよ」
人、か。星丸が変わらない、と言っているのは、どういう意味だろう。
「主殿が生きていた時代も、ケイ殿と光太郎殿と同じように、すれ違った家族が居たでござるよ」
「そうなんだ」
いつの時代も、家族でケンカするってのは、あるんだろう。
「拙者、初めてそれを見た時は、どうしていいか分からなかったでござる。けれど、主殿は、二人の関係を直そうと尽力し、それを改善した」
「そっか。ケンカする人も居たけど、間に立ってくれる人も居たんだね」
「そう、悠斗殿のようにな」
突然、そんな事を言われた。
「まったく、突然何を言うんだよ」
「はは、悠斗殿を見ていたら、主殿を思い出したのでな」
「主殿……ね」
星丸を作り出した科学者と、僕が似ているね。それってやっぱり、星丸にとっては褒め言葉なんだろうか。
「悠斗殿。町が見えるでござるか」
「うん」
「数百年前、拙者が初めてこの地に降りた時は、あそこには何もな

かったでござる」
はるか昔、何百年も昔の事だろう。そのころは、確かにここには何もなかった筈だ。
「それが、今は夜には明るい町になっている。か」
そう考えると、感慨深い。
「こう言う事だった、ござるな」
「へ？」
突然、星丸入った。
「何が？」
「拙者が眠っていた理由でござるよ」
ああ、そう言えば、昼間そんな話したっけ。と言うか、やっと納得したんだ。
「拙者は、この明かりを見るために、眠っていたでござるよ」
「え？」
眠っていた。それは、僕たちが見つけるまで、岩の中に居た事だろうか。
「主殿と姫様は、拙者と共に、小さな村をこの地に築いたでござる。それは簡単なことではなかった。何年も、年十年もこの地で過ごし、二人とも年老いる頃にようやく、村と呼べるような、小さな集落となった」
「あの、昔話の続きなのか」
一人でこの地へと流れ着いた。姫。彼女は、この地で空から降りて来た星丸と、その主と出会った。
「二人は、死ぬ間際になって、拙者に願ったでござるよ。自分たちの代わりに、この地を見守っていて欲しいと。それは、人ではなく鋼の体を持つ、拙者にしかできぬと」
「……そっか」
「だから、拙者は眠りにつく事を選んだでござる。年十年。年百年過ぎたころ、主と姫の子孫が、拙者を起してくれると信じて」
星丸は、淡々と語り続ける。

本当は、胸の内は平静ではないのだろう。けれど、自分の感情を押し殺すように、静かに僕に語り聞かせてくれた。
「拙者、あの村が町となり、今、夜に輝く星のように明かりを出す地となった事が嬉しい」
「君を生んだ人が、作った町だからね。兄弟みたいなものなのかな」
「そうだござるな」
ロボットと兄弟の町か。自分で言っておいて、ちょっと変だ。
「それに、悠斗殿たちとも出会えた」
「それは、大した事ないでしょ」
僕たちは、どこにだって居る普通の人間だ。たまたまこの町に来て、星丸を見つけて、ちょっと熊と追いかけっこしたくらいだ。
「謙遜する事はないでござるよ」
「……そうだね。ロボットと友達の人間なんて、そう居ないからね」
「はは、そう来たでござるか」
そんな風にくだらない話をしているうちに、町の上空へと着いた。
星丸は徐々に高度を下げていく。
町の人たちも、星丸が近づいてくる事に気付いたのか、一人、また一人と家の外に出て、こちらへと集まってくる。
月明かりを受け、ゆっくりと降りてくる星丸。
その姿は、きっと数百年前に、この地へと流れて来た少女が見たものと同じなんだろう。それは、まるで夜空から降りて来た星。
「めでたしめでたし、かな」
つい、そんな言葉が口から出た。

それから数日。僕は電車に揺られていた。理由はもちろん、住み慣れた我が家に帰るためだ。
あの日、僕たちが町に戻ってから、大変だった。
岩三郎おじさん達、爺さんの探索に出ていた人たちが町に戻ると、散々爺さんに文句を言い始めた。最初はおとなしく聞いていた爺さんも、途中から頭にきたのか、岩三郎おじさんと舌戦を繰り広げ始

めた。
まあ、翌日にはお互いそんな事ケロリと忘れていたけれど。
そんなこんなで、少しハプニングはあったけれど、星空町の夏祭りも無事に行われた。
今年は、まさかの星丸の登場に、町の人も大喜びだった。
もちろん、それは星丸だって同じだ。まあ、１０メートル近くの巨体が、子供みたいにはしゃぐのは、少し怖かったけれど。
それ以外にも、沢山の事があった。
思い出は、沢山出来た。
最初は、乗り気ではなかったけれど、今だったら間違いなく、あの町へ行って良かったと思える。
「お兄ちゃん、また来年、行きたいよね」
隣の席に座った美優が言う。
「はい」
その真向かいに座るケイも、返事を返す。
二人とも、ウキウキした表情で僕の顔を覗き込んでいる。そんなにこちらを見なくても、僕がどう言うか、分かっているだろうに。
「うん」
もちろん、同意だ。
「でも、残念だな」
不意に、美優がつぶやいた。
「何が？」
「せっかくケイさん達と友達になれたのに、また暫く会えないんだもん」
その言葉に、ケイも少し表情を曇らせる。
この二人、随分と仲良くなったからなあ、やっぱり、離れるのは辛いんだろう。
美優は、星丸と別れる時も、大分名残惜しそうにしていた。
この町で思い出が出来たのは、僕も美優も同じだ。まだ小さい美優の方が、感じる事も多いんだろう。

「大丈夫だよ」
「大丈夫、なの？」
僕の言葉に、美優は不安そうに聞き返す。
「星丸がさ、ケイ達が森に入って、行方が知れなくなった時、言ってたんだ。たとえ距離が離れてても、同じ空の下に居るんだから、必ず会えるんだって」
「……」
「……」
美優も、ケイも僕の言葉を静かに聞いていた。
「だからさ、またすぐ会えるよ。連絡を取りたいなら、手紙なり、電話なりで連絡を取ればいいんだし」
「お兄ちゃん、たまにはいい事を言うんだね」
そんな僕の言葉に、美優は茶化してくる。生意気だけど、落ち込んでいる折は全然マシだ。
「あ、そうです」
突然、ケイが手を叩いた。
僕たちが驚いてケイの方を見ると、ケイはメモ帳とボールペンを出して、何かをスラスラと書いている。
やがて、筆を止めるとメモ帳を僕の方へと差し出した。
「これ、ワタシの日本での住所デス」
「あ、ケイさんって、日本に住んでたんだ」
「ハイ、昔はイギリスに居ましたけど、居間は日本に居ます！」
なるほど。んじゃ、案外会いに行くのも無理じゃないんだね。どれどれ、住所を確認してみよう……ええと、東京都……あれ？
「どうしたの、お兄ちゃん、変な顔して」
「もしかして、文字が読めませんでしたか？」
二人して、僕の方を心配そうにのぞきこんでくる。悪いけど、心配するような事はないんだ。
「いや、偶然って、怖いなあって」
そう言って、僕は美優の方へメモを差し出す。

「あ！？」
美優も気がついたようだ。
「あの、お二人とも、どうしたんデスか？」
そして、一人状況を理解していないケイは、不思議そうない僕たちに問いかける。
「ケイ、驚かないで聞いて欲しんだ」
「は、はい」
「僕たちとケイ、同じ町に住んでるよ」
「え！？」
僕の言葉を聞いたケイは、その青い目をまん丸に広げて驚いた。無理もないさ、僕たちも驚いたんだから。
けれど、ケイの顔は、すぐにパアッと明るくなった。僕たちと同じだ。驚いたけれど、それ以上に嬉しいんだ。
「それじゃあ、またすぐに会えますね！」
「うん！」
状況を理解した後、美優とケイは大いに喜んだ。もちろん、僕だって同じだ。
「ねえ、ケイさん、何時だったら遊べるかな」
「ミユとだったら、何時でも大丈夫デス！」
女二人は、さっそく遊びの相談を始めてしまう。男一人の悲しさと言うか、一人あぶれてしまった僕は、窓の外に広がる空を見上げた。
空は、雲ひとつない、見事な青空だった。
かつて、この空から星丸は降りて来た。
星丸が降りた地は、やがて町となり、今も多くの人たちが過ごしている。それは、これからも続いていくだろう。
かつて、星が降ったと言う伝説と、その星を伝え続けながら。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8366x/

星の降りた町

2011年10月23日01時02分発行